



超現実的な 母乳戦争の 予感

春昼

第一章 母乳テロリズム宣言

僕は、誰か見知らぬ女性の乳首を吸っていた。

僕の体は、女性の手を支えられている。彼女の胸にも、腕にも温もりがある。弾力のある肌に体を寄り添わせていると、彼女の胸の中に埋没しそうな心地になる。

吸い込んだ乳が口の中に溢れてくる。いつもコンビニやスーパーで買っている牛乳とは違って、生温かい。僕は商品ではない、人間の母乳を吸っている。殺菌消毒されてもいないだろう。

彼女は、誰なのだろう。

今僕が乳を吸っている相手は、僕の母親ではないかもしれない。その場合、この乳は母乳と呼べるのだろうか。母親ではない女性の乳だとしたら、人乳と呼ぶべきだろうか。

顔を上げて、眼球を上動かしてみる。顔の動きと連動して、僕の唇が、彼女の乳首から離れた。開いた口から、飲みかけの乳がこぼれる。

彼女の顔を見ることはできなかった。

顔の代わりに、日光が視界を覆った。

瞼の筋肉に力をこめて、目を閉じる。時間をかけて、瞼を開き直してみる。

朝日に照らされているレースのカーテンが見えた。小鳥の鳴き声と、通りを走る自動車のエンジン音が聞こえる。

僕の体は、ウレタンマットのベッドの上に横たわっていた。バルコニーの方を向いた頭は、枕代わりに重ねたサマーブランケットの中に沈んでいる。

僕は100%純正シルクのふとんを両手で抱きしめていた。腰は丸まっている。肩は盛り上がり、力が入っている。長時間同じ姿勢を続けたせいか、肩と腰の筋肉が緊張している。

さっきまで、体を重ねていた女性の姿は見当たらなかった。

ベッドの上で体をひねる。部屋の中を見回しても、女性の姿は見当たらない。

シャワーを使っている音はしないし、キッチンで朝食を作っている気配もない。トイレに入っているわけでも、僕を部屋に残して外出したわけでもないだろう。夢だったのかもしれない。

僕はベッドサイドにあるローテーブルに腕を伸ばした。

液晶テレビのリモコンを探してみる。収納ボックスの中には、ハードディスクレコーダーと、テレビゲーム機のリモコンしか見当たらない。

枕元に目を移してみた。ベッドの上にテレビのリモコンがおいてあった。

リモコンの電源ボタンを押してみる。二十六型液晶テレビの電源は入らない。

リモコンをテレビ画面に向けて、もう一度赤い電源ボタンを押す。液晶画面は黒いままだ。

昨晚寝る前にテレビ本体の主電源を落としていたことを思い出した。

僕はベッドからフローリングの床に足を下ろして、テレビに歩み寄った。テレビの主電源ボタンは、液晶画面の上部についている。乳首のように突起しているボタンを人差し指で押してみた。僕の指よりも太いボタンがへこんだ。

テレビ本体から、カチッと音が鳴る。指の力を抜くと、主電源ボタンが再び盛り上がった。

テレビのスピーカーから、人気女性アイドルグループの曲が流れ始めた。アップテンポのダンスミュージックに、思春期の女性特有の細い歌声がのる。

真っ黒だった液晶画面に、アイドルグループの女の子たちが現れた。彼女たちはサイズ大きめの白いワイシャツに、赤いチェックのミニスカートを身につけて、踊っている。手にはマイクでなく、アイスクリームを持っている。

コーンカップの上に、白いアイスがのっている。アイドルたちはアイスクリームに向けて歌っている。歌の合間にアイスクリームに口をつける。

唇で触れてから、アイスクリームの先端をかじり取ってみたり、舌で舐めてみたり、黄色いコーンに口をつけてみたり。黒髪の少女たちがアイスクリームに触れる度、カメラが少女の顔をアップで映し出す。

画面左上に丸みを帯びた書体で、現在時刻が表示されている。七時十五分だった。

僕はTシャツにボクサーブリーフ姿のまま、トイレに向かった。

トイレのドアノブに手をかける。トイレに鍵はかかっていなかった。ドアを開く。トイレの中に、女性はいない。

グレーのボクサーブリーフを下ろして、便器に座った。朝起ちしているペニスを指で押さえつける。

尿よ出て来いと、脳の中で声を出してみる。ペニスの先端から、夜の間にたまった尿が放出された。

尿が便器の外に飛散しないように、ペニスを指で真下に向けた。尿が便器に当たると、音が生まれる。僕は耳を澄ませて、放尿が生み出すリズムを聞いた。

ペニスに指を触れて、尿を出しているうち、僕は牛ではないかと思えてきた。ペニスは乳首で、尿は牛乳だとする。僕は今、人間に飲ませるために乳を出している母牛ではないか。

尿は出続けている。男性器は、乳首に似ている。僕は尿ではなく、乳を放出しているのかもしれない。

「男性のペニスとは、女性にとっての乳首である」誰かフランスの思想家が、そう言っていなかっただろうか。

放尿音が途切れがちになると、体が震えた。震えたくはないのに、全身が痙攣する。二回の痙

攣がすむと、尿も止まった。

立ち上がり、ボクサーフリースを腰まで上げる。便器の外に尿が飛散していないことを確かめてから、トイレの水を流した。

＊

僕はキッチンに立ち、水道水のレバーをあげた。浄水器からシャワー状になった水が出てくる。両手を軽くシャワー水につけてから、石鹼を手にとった。

石鹼の泡を指先、指の隙間、手の甲まで広げる。僕は力を抜いて、手のひらや指の間を何度もこすった。

水に手をかざして、石鹼の泡を洗い流す。水を感じながら、両手の指を忙しく動かすうちに、水の色が透明から白に変わった。いつもとは、感触も違う。

水ではない、水道から牛乳が出てきている。僕は両手をひっこめた。

浄水器のシャワー口から、牛乳が出ている。何か事故でも起きたのだろうか。水道局からお知らせはなかったし、ニュースでもそんな話題は出ていなかったはずだ。

水道水のレバーを下げて、牛乳を止めた。手には牛乳が付着している。リビングに戻って、ティッシュで牛乳を拭き取った。

テレビには朝のニュースが映っている。清楚なお嬢様風の女子アナ二人が、芸能リポートを報じている。僕はリモコンを手に取り、チャンネルを変えた。水道から牛乳が出てくるニュースは報じられていなかった。

テレビの前、ローテーブルの上においてあるノートパソコンの電源を入れる。インターネットでニュースがないか検索してみることにした。

ヤフーのトップニュースを見ても、グーグルのニュースを見ても、水道から牛乳が出てくる事件は取り上げられていなかった。さっきの牛乳放出は、僕の見間違いだったのか。

もう一度キッチンに立って、水道水のレバーを上げてみた。白い液体が、シャワー状になって出てくる。単に水が白く濁っているようには見えない。牛乳が出ている。

水道から出てくる白い液体をコップに入れてみた。口をつけて確かめてみる気にはなれない。コップに鼻を近づけて匂いをかいでみた。

牛乳の匂いがどんな匂いか、普段意識したことはないから、牛乳の匂いは覚えてはいない。コップの中の液体は、甘い香りがするように感じられなくもない。牛乳かどうかは定かでないが、飲んだらおいしそうだ。

コップの中に指を浸して感触を確かめてみようかとも思ったが、直接接触は危険そうなのでやめることにした。

僕一人で対処すべき問題ではない。水道局に電話してみることにした。

僕はコップの中の白い液体を排水溝に流した。使用済のコップはいつも水で洗うが、水道からは白い液体しか出てこないのだ。洗うことができない。コップをよくふって牛乳をふり落とししてから、コップ置き場に戻した。

ガス、電気、水道などの契約書を入れた封筒を本棚から探し出した。水道局のパンフレットに書かれた電話番号に、家の電話機から電話してみる。

三回ベルが鳴ると、留守を告げるメッセージに切り替わった。土曜日の早朝、水道局の営業時間外だった。

ローソファーに座り、ファイアフォックスのタブを開く。今の状況をツイッターに書き込むことにした。

「水道から牛乳が出てきました。ニュースでもやっていないし、水道局に電話してもつながらない」

ツイートボタンを押す前、どれくらいの人が、僕の投稿を真実だと認めるだろうかと思い悩んだ。

僕は日常の記録に混じって、時々ツイッター小説も投稿していた。水道から牛乳が出てくるなんてありえない、どうせツイッター小説だろうと誤解されるかもしれない。

大勢の人の家の水道から牛乳が出てくるのなら、ツイッターや2ちゃんねるで既に盛り上がっているだろう。僕の部屋だけ、あるいは僕のマンションだけ、水道から牛乳が出ている場合は、はったりの投稿だと勘違いされる可能性がある。

それでもいい、投稿することにした。僕の投稿がきっかけとなって、水道局に問い合わせが殺到するかもしれない。同じように水道から牛乳が出て困っている人が、助かるかもしれないのだから、投稿を放棄する必要はない。

ツイートボタンを押した後、僕はファイアフォックスのタブをブログの管理画面に切り替えた。ツイッターに続けて、ブログに水道から牛乳が出た事実を書くことにした。

ツイッターは文字でしか表現できないが、ブログなら写真や動画も使える。

文字と映像では、訴える力が異なる。みんなを楽しませるために愉快的な嘘をつく狼少年ではないのだと証明するためには、水道の蛇口から牛乳が出ている写真を撮影して、ブログに掲載するのがよいだろう。

ただし、現代のデジタル技術を持てれば、写真の合成なんて個人のパソコンで簡単にできる。水道水を白く塗り潰しただけだろうなどと推測されかねない。動画を投稿したとしても同じだ。動画ファイルの編集も、個人所有の技術で簡単にできる。

自分一人しか体験していないことを事実だと人に認めてもらうには、困難がつきまとう。ブログの投稿をやめようかと思ったが、真実性を証明できないとしても、投稿してみようと思い直した。

水道から、牛乳が出てきたのは、僕個人にとっての事実である。僕が目撃した事実を人に伝えて、認識してもらうことで、僕以外の人にとっても、事実として認知されることになる。言葉で説明するだけでなく、写真や動画で証拠を提示した方がいいだろう。

さっきコップに入れた水道水、いや水道牛乳と呼ぶべき液体を捨てたのは、間違いだった。もう一度コップに水道牛乳を入れて、携帯電話のカメラで撮影した後、冷蔵庫に保管してみることにした。

携帯電話を持って、キッチンに立つ。先ほど水道牛乳を入れたコップを手取る。

水道のレバーを上げる前に、躊躇した。

待て、これは水道牛乳ではないかもしれない。水道母乳かもしれないではないか。

＊

水道から白い乳液が出てきたとする。それが牛乳だなんて、決めつけられるだろうか。

迂闊だった。白い乳液は、豆乳かもしれない。保湿効果のあるメイク用の乳液かもしれないし、人間の母乳かもしれない。

母乳？

水道から母乳が出てくるなんてことがあるのだろうか。

近所のコンビニやスーパーに行けば、牛乳パックがたくさん並べられている。コーヒーショップでは、牛乳を入れたカフェラテが、毎日何杯も作られている。スイーツを作るのにも、原料として牛乳が必要だ。

僕らの生活は、たくさんの牛乳を必要としている。けれど母乳なんて、日常生活で目にする機会はあまりない。

女性の乳房はマスメディアのいたるところに露出しているけれど、母乳はマスメディアに出てこない。母乳を見せられても、性的興奮が起きないせいだろうか。

赤ちゃんを抱いておっぱいを飲ませている女性モデルの映像は、時々CMや雑誌で見かけることがある。あれはセミヌードと変わらない、視聴者の性的満足を狙ったサービスカットなのだろうか。

僕はキッチンでコップを持ったまま、母乳に関する思考を続ける。

水道から母乳が出てくると仮定しよう。

何故水道から母乳が出てくるのか？ 原因になりそうな場面を想像してみる。

北朝鮮のテロリストが、赤ちゃんのいる女性を次々と誘拐して、水道局に立てこもったのかもしれない。銃をつきつけ、怯える女性たちから母乳を出させて、水道にたらしこんでいるのかもしれない。

僕の部屋の水道から母乳が出てくるためには、一体どれくらいの女性の母乳が必要なのだろうか。

僕の部屋だけを狙うことなど不可能だろう。水道局から僕の部屋まで母乳を届けるためには、大量の女性の母乳が必要になるはずだ。

いや、テロリストと、テロリストに拉致監禁された女性は、水道局にいたのでなく、マンションの水槽にいるのかもしれない。テロリスト一人、女性一人だけでも、がんばれば僕の部屋に母乳を運べそうだ。

けれど、何のために？

敵の狙いは何だ？

愉快犯か？

何馬鹿なこと考えてるんだらう。テロリストに女性が拉致監禁されて、母乳を搾取されてるなんて状況、起こりえるはずがない。

しかし、水道から先程白い乳液が出てきたことは、事実だ。乳液が出てきた原因はわからな

いが、事象は再現可能だ。もう一度水道から乳液を出してみよう。

水道管に取り付けた浄水器のシャワー口にコップを構えた。左手には、携帯電話のカメラを持っている。

水道から乳液が出てくる瞬間を携帯電話のカメラで撮影する。かつ、乳液を入れたコップにサランラップの封をして、冷蔵庫に入れて保管する。これで水道から、牛乳か、人間の母乳か、あるいはまったく別の生物の乳か、判然としない乳液が出てきたという物的証拠を残すことができる。

ごくりと喉を鳴らしてから、水道のレバーを掴む。

先程水道から出てきた白色の乳液は、牛乳にそっくりだった。勢いよく出ていたし、水っぽかった。今出てきているのは、粘っこい液体だ。

浄水器のシャワー口から、細い線となって出ているけれど、コップに落ちる前に、互いにまとわりつき、絡み合っている。

僕は、この濃厚な液体によく似た物質を知っている。卵の黄身だ。

水道から卵の黄身が出てくる？

そんな気持ち悪い話があるか。

卵だぞ。

僕はレバーを下げて、卵によく似た液体の流出を食い止めた。ステンレスのコップには、黄色の液体がたまっている。

水道から水道水以外の液体が出てくる様子を携帯電話のカメラで撮影する予定だったのに、カメラのスイッチを入れるのを忘れていた。もう一度、水道から黄色い液体を出すのは嫌だった。あの光景はもう見たくない。

止まっているエスカレーターに足をかけると、体全体がぶらつくことがある。あれと同じだ。水道からは無色透明の水道水が出てくるものだ。異常な事態が起きると、人体は拒否反応を示す。

僕は液体の入ったコップを浄水器の真下に構えて、携帯電話のカメラで撮影した。

液晶画面を覗いてみる。コップの中にたまった黄色い液体を写真にとらえることができた。

写真で見ると、中の液体は、オレンジジュースに見えなくもない。ただし、液体のどろどろ感は、絞りたてのオレンジジュースの比ではない。生卵を割って、箸で何回もかき混ぜた後の卵の質感と同じだ。

携帯電話で撮影した写真からは、卵の質感が消えていた。この写真を見た人に「コップに入れたオレンジジュースなんか撮影して、何が楽しいんだろう」と誤解されかねない。

コップを揺らして、中の液体がオレンジジュース以上にどろどろしている様子を動画撮影してみようかと考えたが、僕の携帯電話はウィルコム of 古いタイプだし、動画撮影機能がついていなかった。

コップにサランラップで封をして、冷蔵庫の奥に保管した。

冷蔵庫のドアを閉じる。水道から牛乳にそっくりな乳液が出てきた後は、卵が出てきたのか？
ん？ 卵？

あの液体が卵だと誰が決めた？

黄色くてどろどろした卵によく似た液体が出てきただけだ。

黄色は自然界では、危険な色だ。毒液かもしれない。やっぱりこれは、日本に対するテロ行為だろうか？

＊

僕はリビングに戻り、ノートパソコンの前に座った。

先程携帯電話で撮影した写真をパソコンのメールアドレスに送る。メール後すぐ、パソコンの受信トレイに新着メールが届いた。

新着メールをクリックする。黄色い液体が入ったコップの写真が、液晶画面にあらわれた。

やっぱり画像で見ると、オレンジジュースに見えてしまう。コップの中に入っている黄色い液体は、水道から出てきたものであり、どろっとして卵みたいだったと伝えるためには、言葉の補足が必要だった。

あの液体の成分を科学的に分析した方がよいだろうかと悩んでいるうち、お腹が減っていることに気づいた。起きてからずっと水道に時間を奪われてきた。朝食をとってから、写真をブログにアップすることにした。

クローゼットから白のコットンシャツと、ブラックジーンズを取り出す。靴下は、白と黒のストライプ模様を選んだ。

着替えている最中、冷蔵庫に入れた黄色い液体を飲めば、朝食代わりにするんじゃないかと思えてきた。

いやいや、あれはテロリストが東京都内の水道管にばらまいた毒薬かもしれない。卵みたいでおいしそうだが、口をつけた途端に毒が全身に回る劇薬かもしれない。

火を通せば大丈夫じゃないの？ 頭の中で悪魔がささやく。

黄色い液体をフライパンに広げて、火を通せば、卵焼きができるんじゃないの？

いやいや、危険すぎる。火を通して出てきた煙をかいだ途端に、肺が毒に犯される可能性もある。

あの液体を冷蔵庫の中に入れておくだけで、周りにある食品に毒がまわるんじゃないかと不安になってきた。

コップはサランラップで封をしているが、ラップの隙間から気化した毒素が漏れ出て、冷蔵庫の食品を劇薬に変えるかもしれない。

冷蔵庫の中には、ミネラルウォーターのペットボトル、牛乳パック、スモークチーズ、ヨーグルト、カスタードプリンが入っている。時間がたって、黄色い液体が猛毒だと判明したら、もったいないが、冷蔵庫の中身を全て捨てた方がよいだろう。

黒革の財布をジーンズのポケットに突っ込み、黄色のサンダルを履いて、部屋の外に出た。

外には小雨が降っていた。

コンビニまで歩いて一分とかかるから、小走りで行けば、傘はいらない。ただし、近所のコンビニに美味しい食品がなければ、さらに一分ほど歩いて、交差点の向こうのコンビニまで行く必要がある。念のため、傘は必要だ。

僕は玄関に立っているビニール傘を持って、部屋の鍵を閉めた。三階の部屋からマンションの階段を駆け下り、オートロックの玄関を抜ける。郵便ポストの前で、ビニール傘を広げた。

マンション手前にある歩道に、小さな水たまりができています。雨の日に毎回できる水たまりだ

。

水たまりは、いつもと異なり、白く濁っていた。

目を凝らしてみる。降っている小雨も白い。

初秋だし、いくら異常気象でも、みぞれが降ってくるわけがない。白い雨は液体のみで構成されている。雨の中に、水分子以外の、何らかの化学物質が混ざっている。

水たまりの近くに寄ってみた。水は白濁している。雨水の中に牛乳でも混ぜたみたいだ。

僕の部屋の水道を乳液化したり、どろどろの黄色い液体にした組織が、白い雨を降らせているのだろうか？ 北朝鮮あたりのテロリストの仕業だろうか。

人為的テロ行為ではなく、自然現象、あるいは公害だと考えられなくもない。中国の黄砂が日本海を渡って、日本列島に降り積もることもある。中国の工場排水によって汚染された水が、雨となって東京に降り注いでいるのかもしれない。

しかし、これでは僕の部屋の水道から、白や黄色の液体が出てきた理由にはならない。やはり何らかの組織が、関与していると考えた方がいいのだろうか。

例えば、雨雲の上にたくさんの成人女性がいて、乳を搾られている可能性はないか。

巨大空母のハッチから、体を縛られた上半身裸の女性が吊るされている。彼女たちの乳が搾られて、東京に母乳まじりの雨が降っているという可能性はないだろうか。

中学二年生の妄想みたいだが、可能性は捨てきれない。ブレインストーミングを続けよう。

巨大空母の中に牛が牧畜されており、どこかの農家にもある人工乳絞り器によって、牛の乳が搾取されている可能性はないだろうか。

人間の女性が母乳を搾取されているとしたら、おっぱいが剥き出しだし、性的虐待を受けていると言える。人道的に問題である。

しかし、牛が乳を搾取されている場合、牛にとっては牧場の中で搾取されるのも、空母の中で搾取されるのも変わりはない。人間の女性より、メスの牛が母乳を搾取されている可能性の方が高いのではないか。

空母の中は気圧が高いから、牛は不快かもしれない。牛のためには、空母の中で搾取するのではなく、いつものように農家の牧場で搾取する方がよいだろう。

牧場で搾った牛乳を空母に輸送して、腐らないうちに上空からばら撒いた方が、人間にとっても、牛にとっても効率的だ。いや、腐るのを待ってからばら撒いた方が、日本人に攻撃するには、好都合かもしれない。

人間の場合でも同じだ。地上で搾取した母乳を空母に運んで、ばらまいた方が、人体空輸コストを考えると経済的だ。

若い組織員に自爆テロを薦めるようなテロリスト幹部でも、訓練した女性兵士の乳を搾取することは、さすがにないだろうと思う。乳を搾られているのは、おそらく誘拐後、監禁された日本人女性だろう。

牛の乳をばらまくより、日本人女性の搾りたての母乳を空中散布する方が、日本人に対する精神的ダメージも大きいはずだ。これは、母乳テロと呼べる。

自爆テロをするよりも、爆弾を敵国市民の誰かのポケットにこっそり入れて、後で爆発させる方が、兵士の損失もないので合理的だと思えるが、自爆テロには、自爆という自己犠牲行為に英雄的賞賛を与える意味があるのかもしれない。

自己犠牲の精神を尊ぶという観点からしたら、日本人女性の乳を搾るより、自分たちの部隊の

女性兵の乳を搾る方が、テロリスト的には正解なのかもしれない。

「よくごこんな屈辱に耐えてくれた、君の組織に対する貢献は賞賛に値する」などと男性幹部が、母乳を提供した若い女性兵士をねぎらうのだ。

いや待て、自爆テロの場合は、自身の命を捧げることによって敵国民の命を奪うことができるが、母乳テロでは、敵国には何のダメージも与えていないじゃないか。何だか変なことをされたと、気味悪がられて終わりである。

「自分たちの女性兵の母乳をばらまいた」なんて後で犯行声明を発表しても、笑い話になるだけだ。これではテロ行為になっていない。

可能性は絞られた。白い雨が降る原因として、三つの仮説が考えられる。第一に、誘拐された日本人女性の母乳が、雨の中に混じっているという母乳搾取テロ説。第二に、有害物質である白い液体が、雨の中に混じっているという化学兵器テロ説。第三に、中国などの工場から排出された汚水によって、雨が白く濁ったという公害説。

もう一つ、第四の仮説がある。雨水が白く見えるのも、僕の部屋の水道が白と黄色に変色したのも、僕の錯覚ではないかという説だ。

＊

水道から白や黄色の液体が出てきたことも、空から母乳が雨となって降っていることも、僕の錯覚だろうか。

水道からは、無色透明の殺菌された水道水が出ており、空からは酸性気味の水が降っている。僕はそれらの液体を、H₂Oとは別の化学物質だと見間違えているだけなのだろうか。

僕には目覚めている意識があるが、今僕は、眠っているのかもしれない。今僕が経験していることが、眠りながら無意識に体験している夢ならば、母乳テロが起きるのも不思議ではない。

母乳テロをしたところで、テロリストにどんなメリットがあるだろう。

日本が憎たらしいなら、日本人を殺したらいい。水道から母乳や卵が出てきたり、空から母乳が降ってきたとしても、日本人は、ちょっとびっくりするだけだ。

白い液体の中に致死性の毒が混じっていたなら、母乳テロは日本にとって驚異だが、ただの母乳だったら、驚異にはならない。テロ行為の目的が、テロの標的に驚異を与えることなら、母乳テロはテロではない。母乳エンターテインメントと呼ぶ方がふさわしい。母乳テロも母乳エンターテインメントも、現実には起きるはずがない。

本物の僕は、眠っているのではないだろうか。今目覚めていると意識している僕は、本当のところ、無意識の中に存在する幽霊に過ぎないのではないか。母乳テロは現実ではなく、夢の中で繰り広げられている母乳エンターテインメントなのだろうか？

そういえば僕は今朝目覚めた時、誰か見知らぬ女性の乳を吸っていた。僕は夢から目覚めたわけではなく、今も現実から乖離した、夢の中を生きているのかもしれない。

そう反省している間も、空からは白く濁った雨が降り続けている。朝食を買いに行くために外に出たことを思い出した。

歩道を歩いて、自動車の走る通りに出た。

僕の住むマンションは、道路から少し奥まったところにある。道路沿いには、コンビニがある。道路の向かい側には、百円ショップもある。

今百円ショップになっている場所は、一年前コンビニだった。

僕は以前、道路を渡って、コンビニに行っていた。道路のマンション側に新しいコンビニがオープンしたため、僕は新しいコンビニを利用するようになった。

最初、新しいコンビニが出店してきた時は、道路の向こうにコンビニがあるのに、何故出店するのか不思議だった。けれど、そのコンビニは売上とお客をとって、道路向かいのコンビニを潰した。新しいコンビニは、売り場面積こそ潰れたコンビニより狭かったが、注文メニューやスイーツが豊富で、弁当もおいしかった。市場競争に勝つ勝算があったのだろう。

商品も棚もない無の空間になった後、コンビニだった建物は、百円ショップに生まれ変わった。

潰れたコンビニの店長さんたちには申し訳ないけれど、市場競争とは、世間の人情を度外視した利益獲得競争だ。敗れた者は市場から撤退し、世界はどんどん便利になっていく。

人類はそんな楽観的に発展したわけでもないけれど、少なくとも、僕の生活は、百円ショップ

とコンビニの二本立てになったおかげで、快適になった。

土曜日の午前八時前後、コンビニはオープンしているが、百円ショップはクローズしている。百円ショップは無人だ。ガラス越しに店内の様子が見えた。

店の棚には、いつも大量の商品が並べられているけれど、今朝は商品がおかれていない。何かおかしい。

白い雨の降る道路を渡って、店内を間近から覗いてみた。

店の棚には、百円玉が置かれていた。

＊

百円ショップの店の棚に、百円玉が並べられている。

店の一番道路側、お菓子が何個も並んでいた箇所には、百円玉が敷き詰められている。傘や雨具が置かれていた場所も百円玉しかおかれていない。健康器具、台所用品、服飾雑貨、全て百円玉に変わっていた。

どうやら、商品一個に対して百円硬貨一枚というルールで、商品が百円玉に転換したようだ。何かの調査でもしているのだろうか。

百円ショップの商品を全部百円玉に変えてみたら、百円玉が何枚必要か、数える遊びでもやっているのだろうか。

ここの百円ショップで商品を買うと、商品一個につき、百五円かかる。正確さを規すならば、棚に百円玉一枚と、五円玉一枚を重ねて並べるべきだろうが、さすがにそれは面倒くさいから、百円玉しかおいていないのだろうか。

昨日の夜まで店にあった商品は、どこにいったのだろう。昨夜のうちに泥棒が商品を盗んだのだろうか。ただ盗むのは心が痛むから、丁寧に百円玉を棚に並べていったのだろうか。

商品を持ち去った泥棒は、商品代を払っているのだから、泥棒とは言えないかもしれない。良心が残った泥棒に成りきれていない泥棒と言ったところか。

商品代金は税込百五円なのだから、良心的な泥棒は、五円分得したことになる。たった五円といっても、百円ショップの全商品につき五円得したら、結構な儲けになる。

百円玉は他の百円玉とぶつからないよう、規則正しく順番に並べられている。

無造作に慌てて並べたわけではない、店員さんが商品をきれいに配置するように、百円玉はディスプレイされていた。ここは百円ショップから、百円玉ショップという新しいお店に変わったのだろうか。

百円玉ショップ。お店に来たお客さんは、棚にある百円玉を手にとって、レジに向かう。レジにいる店員さんに百円玉を渡すと、店員さんが「〇〇円です」と料金を言う。お客さんはお金を払って、百円玉を手にする。

ここが百円玉ショップだとしたら、ディスプレイされている百円玉は、いくらなのだろう？

百円ではないかもしれない。全てドルや人民元で価格がつけられているのかもしれない。

商品が百円玉だけだったら、こんな風に綺麗にディスプレイする必要はないと思えた。多種多様な商品がディスプレイされているからこそ、百円ショップは魅力的なのだ。

いや、ひょっとしたら、それぞれの棚に並べられた百円玉は、発行年や使用度が異なっているのかもしれない。

店の奥の方には、戦後初期に発行された百円玉が並べられているのではないか。中には発行枚数が少ないレアな年もあるのではないか。奥の棚から順番に、年代順に百円玉が並べられているのではないか。

同じ年でも使用度によって見た目は変わる。きれいな百円玉を欲しがるお客さんもいるかもしれないし、使い込まれて汚くなった百円玉のビンテージ感を楽しむマニアもいるかもしれない。

現代は趣味が多様な時代である。百円玉ショップにおかれている百円玉は、発行年と使用度によって、百円とか百三円とか細かく値段設定されており、硬貨収集オタクの間で話題のショップなのかもしれない。

店のレジ裏には、「今は亡き有名アイドルの〇〇さんが触った昭和〇〇年発行の百円玉」というプレミア百円玉が、金庫の中に保管されているかもしれない。

店の端にあるレジに目をやる。レジカウンターに、大量の商品が積まれていた。昨日まで、棚にディスプレイされていた商品たちだ。

いつも店員さんが立っている狭いスペースにも、商品が積まれている。天井すれすれの高さまで、価格百円（税込では百五円）の商品が積み上がっている。

店の商品全てが、レジカウンター裏には入りきらないだろうから、お店に残っているのは、一部の商品だけだろう。ほとんどの商品は、別の場所にもう運ばれているだろう。

誰かのいたずらか、泥棒の仕業か、棚卸の一貫か、テレビ番組の企画か、百円ショップから百円玉ショップに変わったただけなのか。棚の商品が百円玉に変わった理由として、思いつく仮説はそんなものだ。

テロの可能性は小さい。水道から乳が出てきたり、空から白い雨が降ってくるより、百円ショップが百円玉ショップに変わるのは、よっぽど健全だ。

＊

僕は道路を渡り、百円ショップの向かいにあるコンビニに入った。ここでいつもみたく、割りそばかパンを買って、朝食にする予定だった。

百円ショップ同様、入り口近くのレジカウンターに、商品が天井近くまで積まれていた。店員が注文されたソフトクリームやスイーツを作る奥のスペースまで、商品が敷き詰められている。店員と客の姿はない。

昨日の夜まで商品があった棚には、硬貨やお札がディスプレイされている。

向かいの百円ショップと同じだ。商品は料金分の日本円に代わり、レジカウンターに商品が押し込められた。

雑誌棚に雑誌はない。ジャンプ、サンデー、マガジン、ヤンマガ、ヤンジャン、モーニング、イブニング、マンガ雑誌はみんな硬貨に変わった。

アップル、ナックルズ、ザ・ベストマガジン、官能実話などの成人向けエロ雑誌も、無機質な硬貨になった。

週刊文春、週刊新潮、週刊現代、週刊ポスト、週刊プレイボーイ、週刊SPA!、週刊ダイヤモンドもない。

ザ・テレビジョン、ファミ通、特選街、週刊アスキー、モノマガジン、グッズプレス、DIME、日経エンタテインメント、日経トレンドィ、ブルータス、ポパイ、ターザン、アンアン、フラウ、ヴォーチェ、クレア、日経ウーマン、婦人公論、小悪魔アゲハ、メンズノンノ、レオン、ゲテなどの雑誌が置かれていた場所には、硬貨が重ねて積まれているだけだ。

税込二百八十円の雑誌なら百円玉二枚、五十円玉一枚、十円玉三枚に変わっていた。

雑誌棚の上にあるマンガや文庫が並べられている場所にも、硬貨が並べられている。

ワンピース、ナルト、銀魂、君に届け、けいおん！ の新刊も硬貨になっているし、西村京太郎の文庫本や知的生き方文庫、PHP文庫も硬貨に変わっている。

ドラゴンボール、キン肉マン、北斗の拳、シティーハンター、こち亀、美味しんぼ、名探偵コナン、ゴルゴ13、ドラえもん、タッチ、犬夜叉、ミナミの帝王、ふたりエッチ、クレヨンしんちゃんなどの廉価版コミックも、棚から消えて、日本円になっている。

コンビニでは百円ショップと違って、税込価格で商品が日本円に交換されている。雑誌棚の奥にある食品の棚には、一円玉硬貨が目立った。

税込二百九十八円だった彩り幕の内弁当は、百円玉二枚、五十円玉一枚、十円玉四枚、五円玉一枚、一円玉三枚に等価交換されていた。

日高昆布、紀州南高梅、焼き鮭ハラミ、熟成生タラコ、贅沢コシヒカリ炙り明太子、キングサーモン白醤油焼き、牛カルビ焼肉大盛りおにぎりなどもない。

ねぎ塩豚カルビ丼、トロトロ玉子のロースかつ丼、赤ワイン入りハヤシライス、漬け焼き牛カルビ重、スーパー海老天重などの弁当類、脱メタボリックバランス弁当、七種野菜とトマトソースの混ぜごはん、ココナッツ仕立てのトムヤム玄米入りごはんなど、ヘルシー系弁当もおいていない。

サンドイッチ、サラダ、スープ、スープ、パスタ、おつまみ、果物、スイーツのおいてあった棚にも、パン、カップめん、スナック菓子、栄養ドリンク、文具、乾電池の棚にも、商品はない。昨夜まで商品がおかれていた場所には、商品代金に等しい硬貨が重ねられている。

下着、ネクタイ、ワイシャツなどがおかれていた衣料品棚には、若干だが千円札もおかれていた。

ここにある全てのお金を集めたら、一体どれくらいの額になるだろう。

時々テレビのニュースにコンビニ強盗の映像が出てくる。コンビニに強盗なんて入っても、そんなに儲からないだろうと不思議に思っていたけれど、全ての商品をお金に換算したら、店内は硬貨だらけになるのだ。コンビニ強盗が、窃盗行為としてポピュラーなことも納得できた。

硬貨は等間隔で、きれいに並べられている。硬貨を並べた人は、商品毎の金額を勘定し、商品代に等しい硬貨を並べていった。

税込二百二十八円の商品なら、百円玉一枚、十円玉二枚、五円玉一枚、一円玉三枚を、下から順番に積み重ねる。

ピサの斜塔みたいに傾いていたり、崩れかけの積木みたいに左右にずれている硬貨の塔はない。どの硬貨の塔も、五重の塔みたいに積み重なっている。

この作業をした人は、大量の硬貨を準備して、一夜のうちに手早く作業をした。等間隔で並べられた硬貨の塔は、古代遺跡のように見えなくもない。誰かが亡くなったから、その弔いとして、硬貨の塔が制作されたのだろうか。

仕事が早く丁寧な作業者も、一つだけ、作業ミスがあった。

ある商品だけ、硬貨に変わっていなかった。

作業ミスではなく、意図的に、その商品だけを硬貨の塔の中に残したのかもしれない。仕事が早く丁寧な彼が、うっかりその商品だけ、硬貨に変換し忘れるなど考えにくい。

彼が残した商品は、紙パックの飲み物置き場にあった。牛乳パックだった。

他の商品は全て硬貨の塔になったのに、牛乳だけが牛乳として生き残っている。

一リットルの牛乳パック、五百ミリリットルの牛乳パック、二百五十ミリリットルの長方形の小さな牛乳パック、牛乳が入っている商品は、硬貨に変わっていない。低脂肪乳も残っている。

バナナミルク、イチゴミルク、豆乳、カフェオレ、カフェラテ、ミルクティー、タピオカミルクは、硬貨に変わっている。低脂肪乳は牛乳に含まれたが、バナナミルクなどは牛乳ではないと判定されたかのようだ。

＊

牛乳のおいてある棚は、冷たかった。牛乳だけを冷やすために、冷蔵のスイッチを入れているのだろうか。

弁当や、スイーツのおかれていた棚に手を突っ込んでみた。今は硬貨しかおかれていないのに、棚の中は冷やされていた。

牛乳と硬貨しかないのに、もったいないなと思う。その後すぐ、二十四時間冷蔵庫のスイッチがつけっぱなしなのは、随分もったいないことだなとも思った。

二十四時間営業のコンビニだけではない、夜は店を閉める百円ショップもスーパーも、外食店も、家庭でも、二十四時間冷蔵庫をつけっぱなしだ。当たり前で電気を消費しているけれど、よく考えると、そんなに大量の食品を冷やす必要はないと思えてきた。

アイスの入っている冷凍庫の電源も入っているのだろうか。確認することにした。

ハーゲンダッツや氷の入っていた縦型の冷凍庫の中にも、硬貨が並べられていた。冷凍庫の細いパイプ棚に、薄い紙がしかれて、硬貨が並べられている。商品のおかれていた位置に、商品代金分の硬貨を並べるというルールは、冷凍庫のパイプ棚でも遵守されていた。

三百円前後の単価高めのアイスが入っていた縦型の冷凍庫の左に、低い横型の冷凍庫がある。横型の冷凍庫には昨日まで、グリコや森永の単価百円前後のアイスが入っていた。

横型の冷凍庫の中には、硬貨が入っていなかった。商品も入っていない。代わりに裸の女の子が入っていた。

裸の女の子が、冷凍庫の中に仰向けで寝ている。体は白い乳液の中に沈んでおり、顔や腕の一部分のみ乳液の表面に浮いている。全身は乳液の下に透けて見えた。女の子の瞳は閉じられている。

昨日まで、冷凍庫は細いパイプでアイスの種類毎に区分けされていたが、区分けのパイプは取り払われていた。

あの乳液、もしかして牛乳だろうか？ それとも人間の母乳？ あるいは豆乳？

コンビニの冷凍庫が乳風呂になって、裸の女の子が湯に浸かっている。

湯ではないかもしれない。昨日までは冷凍庫だったし、隣の縦型冷凍庫は、今でも冷凍されている。これは、コンビニの冷凍庫でなく、冷凍睡眠カプセルだろうか。

冷凍庫の扉を開けて、手を入れてみた。中の空気は冷えている。

白い乳液に手を触れてみた。液体は冷たいが、まだ氷にはなっていない。女の子の体も、乳液も、つい先程入れられたばかりで、まだ冷凍化途中なのだろうか。

僕は、穏やかな顔つきで眠る女の子の頬に手を触れてみた。

少女の頬に人肌の温もりはなかった。僕が指を触れても、女の子は目を瞑ったままにいる。

どうしよう？ 彼女を冷凍庫から助け出そうか。店員か人を呼ぼうか。

水道から水道水以外の液体が出てくるわ、空から乳が降ってくるわ、百円ショップが百円玉ショップになるわ、コンビニの冷凍庫に裸の女の子が監禁されているわ、僕は日本に対するテロ行為に巻き込まれている確率が高い、それもあり変態気味のテロ行為に。

ここまで来ると、テロ行為と変態行為の境界さえわからない。普段の東京では起き得ない珍しい事象が立て続けに発生していることは確かだ。

こういう非常事態に遭遇した時は、警察に電話したり、ツイッターでつぶやいたり、情報を広めようとするものだ。しかし、僕は今、携帯電話もモバイルノートPCもアイパッドも持っていない。情報を発信する手段は、大声で叫ぶことしかない。

朝食を買いに来たコンビニで、裸の少女が乳液漬けになっているのを見つけた時、僕が尊敬する人だったらどうするだろう？

情けない普通の現代人である僕だったら、逃げ出すか通報するだろう。僕が尊敬する人、例えばトルストイとかジョイスとかプルーストとかピンチョンだったら、裸の少女を助けようとするはずだ（今名前を挙げた人の中では、トルストイしか真剣に助けそうにないけれど。まあいい）。

僕は乳液の中に利き腕の左手を突っ込み、少女の右腕を掴んだ。少女の体を引っ張ってみる。警察や救急車の到着を待っているうちにも、少女の体は冷え切って死んでしまうかもしれない。

心臓の鼓動を確かめたわけではない。もう少女は死んでいるか、あるいは仮死状態かもしれない。現場に居合わせている僕が、人工呼吸なり心臓マッサージでもすれば、少女の命を救うことができるかもしれない。人工呼吸も心臓マッサージも、学校と自動車学校の授業でやっただけだから、やり方なんてうる覚えだが、やってみないで逃げるよりは、やった方がよい。

少女の体を引っ張る。少女の裸体が、乳液の中からゆっくり持ち上がる。乳液で濡れた黒い髪の毛が、白い液体を滴らせながら持ち上がってくる。

少女の目が見開いた。僕に腕をつかまれていない少女の左腕が、僕の左腕を掴んだ。

少女に腕を引っ張られる。

僕は一度浮いた両足を床につけて、腕を引っ張り返した。少女の爪が、僕の腕に食い込む。痛い。血も出てきた。

爪を食い込ませたまま、少女が僕の腕を引っ張る。血を見てひるんだ僕の体が宙に浮いた。

僕は冷凍庫のケースのふちに足をひっかけた。冷凍庫の引き戸は開ききっていない。少女がどんなに力強く僕を引き込もうとも、引き戸を全て開くか、僕の体をばらばらにでもしなければ、僕を冷凍庫の扉の中に引き込むことはできないだろう。

怒っている少女の顔と目が合う。少女の息はあがっている。少女の吐息が、冷凍庫の中で白い蒸気を作る。

何故少女はそんなに怒っているのか。僕は少女を助けようとしたのに、逆に僕が、乳液の中に引き込まれようとしている。

僕は冷凍庫のケースの上に足を乗せて、思いっきり腕を引き上げた。少女が抵抗して腕を引っ張り返す。

僕は自分脳で食い込む少女の指を引き剥がそうとした。少女の細い指をつまんで、上に持ち上げようとしてみる。少女の指の力は強く、指が浮かんでも、すぐ元の位置に戻ってしまう。

少女の人差し指から小指まで、四本をまとめて掴む。大物の魚を釣り上げる時のように力を込めて、指四本を引っ張った。

僕の腕から少女の指が剥がれた。少女の爪の先端に僕の血が付着している。

抵抗をあきらめたのか、少女の腕の力が抜けた。僕も手を放した。

少女の体が冷凍庫の乳液の中に沈んでいく。少女は乳液の中に沈んでいくことを望んでいるように見えた。僕も無理に彼女を外に引き出そうとは思わなくなっていた。

少女の顔が見えなくなる。少女の全身が乳液の中に消えた。

乳液の表面には、空気の泡と、僕の赤い血が浮いている。

乳液に人差し指を挿入してみた。

少女の体はない。乳液の中に腕を挿し込んで、指で探ってみても、少女の体にも、冷凍庫の底にも触れることはなかった。

冷凍庫はそんなに深くないはずだ。冷凍庫の底が抜けて、少女はどこか別の世界に落ちていったのだろうか。あるいは、たまたまこちらの世界に浮かんできた別世界の少女を、僕はこちらの世界に引き込もうとしてしまったのだろうか。

僕は冷凍庫から離れた。コットンシャツが乳液で濡れている。匂いをかいでみたら、牛乳臭かった。

＊

このコンビニで牛乳だけ買って帰るのも気が引けた。

僕は朝食を買いに来たのだ。朝食を食べた後、家に帰って、ツイッターやブログで状況を報告する必要がある。警察にも連絡した方がいいし、近所の人全員に非常事態の発生を知らせてもらった方がいいだろう。

テロ行為でもなく変態行為でもないもの、あるいはテロ行為であり同時に変態行為でもあるもの、つまり、変態的テロ行為が続いている間は、外を歩き回らずに、部屋の中でじっとしていた方が得策かもしれない。けれど、僕はまず食事を欲していた。

まずは、交差点の向こうにあるコンビニまで歩いてみよう。そのコンビニも、商品がお金に変わってしまっているかもしれないが。

僕はコンビニを出て、鍋屋横丁の交差点まで歩いた。

青梅街道に面する交差点まで来ると、人通りも車の通行量も増えた。大通り沿いの歩道には、アーケードの屋根がついている。白い雨の勢いが弱いせいか、傘を持たずに歩いている人も多い。

僕は横断歩道の前に立って、信号が変わるのを待った。歩行者用の信号が青になると同時に、僕はビニール傘を持って、横断歩道を歩き出した。

僕の左側には、作業服姿のおじさんがいる。彼は傘もささずに歩いているから、白い雨の洗礼を受けている。

「雨、白いですね？」と彼に質問してみたくもあるが、見知らぬ他人だし、あまり話しかける気もしない。

白い雨が身体に有害だとわかっていれば、彼に「傘に入りませんか？」と声をかけもしただろうが、雨が白く見えるのは、僕の目の錯覚かもしれないのだ。

僕は口をつぐんで横断歩道を歩いた。

横断歩道の向かい側、ドトールの方から、チェニックブラウスにフリルのスカートをはいた若い女性と、制服姿の中学生くらいの女の子が歩いてきた。二人とも傘はさしていない。

このまま歩くとぶつかりそうだったので、僕は体を右にずらすことにした。僕が右にずれると、向かい側から歩いてきた女性も体を同じ方向にずらした。

横断歩道で大勢の人が歩いていると、向かいの人とぶつかりそうになることが時々ある。渋谷駅前のスクランブル交差点なんて、よくあれだけたくさんの人が歩いて、ぶつからないものだと思う。人間の運動神経は、自動車よりも繊細な動作ができる。横断歩道で人とぶつかることはまずない。

普段あまり運動をしない現代人の僕は、運動神経が鈍っているから、歩道ですれ違う人とぶつかりそうになることがよくあるけれど、横断歩道で二対二だ。ぶつからずによけることは、簡単にできるはずだった。

向こうの女の子も運動神経が鈍いのか、僕がよける方向に、体が一緒に動いている。僕が右から左に体を移動させると、彼女も一緒に左にずれる。慌てて足を右に向けると、彼女も一緒に右

にずれる。鏡を見ているような気分になる。

僕は前に進むのをやめた。向かいの女性は、横断歩道の途中で体を左右に揺らしながら、僕の方に近づいてくる。

やばい。このままではぶつかってしまう。

彼女の両手が僕の方に突き出された。そのまま彼女の体が倒れこむ。

僕はビニール傘を投げ出して、彼女の体を受け止めた。

その場に踏みとどまろうとしたが、悲鳴をあげつつ倒れた彼女が、僕の体も押し倒した。

僕は横断歩道の上に倒れた。彼女の体が、僕の上に乗っている。

「わー、ごめんなさい」

謝る彼女は何を考えたのか、僕の唇に自分の唇を重ねてきた。

僕とキスしながら、彼女はうーうー唸っている。

突然の衝突に気が動転して、パニック状態にでもなっているのだろう。唇をひきはがそうと強引に振舞うことは、彼女のパニック状態を高めることになるかもしれない。僕は彼女の背中に手を当てて、なだめるように背中をさすった。

横断歩道で何をしているのだろう僕は。

一瞬冷静になったら、自動車の迷惑になっていないか心配になった。右を見してみる。車は来ていない。自動車用の信号は赤のままだし、交差点を曲がる車もないようだ。

赤信号の前で停車している自動車の運転手と目が合った。黄色いセダンに乗っているメガネをかけた運転手は、僕らがキスする様子を見つめていた。

恥ずかしくなったので、左を向いてみた。僕の隣を歩いていた作業服姿の男性も、向かい側から歩いてきた制服姿の中学生くらいの女の子とキスしていた。

二人は僕らと同じく、横断歩道の上に倒れて、体を抱き合っている。女の子の方が上で、年輩の男性は下になっている。

横断歩道で、向こうから歩いてきた人とぶつかって、倒れこんでキスするなんて状況が、二件同時に発生するなんて、確率的にありえない。これもまた、何かの罫かもしれない。僕が今キスしている相手は母乳テロ、いや、母乳エンターテインメント実行者の一員で、このハプニングもまた、母乳エンターテインメントの一環かもしれない。

作業員の男性と学生の女の子も、母乳エンターテインメントの構成員であり、僕だけが罫にはめられているのかもしれない。

僕は、エンターテインメントを楽しむ側にいるのだろうか。それとも、僕が次々起きるハプニングに慌てる様子を眺めている誰かが、どこか遠く安全な場所で、ショーを楽しんでいるのだろうか。あるいは、僕はゲームのキャラであり、僕を操作して、次々起こるハプニングを楽しんでいるプレイヤーが遠い場所にいるのだろうか。

女の子はキスをやめようとしな。このままでは歩行者用の信号が赤に変わって、走り出した自動車に轢かれることにもなりかねない。さっき僕と目があった黄色いセダンのドライバーは、僕らを轢き殺すことになっても、車を直進させそうだった。

上に乗っている彼女の頭を両手で押さえつけて、彼女の唇をひきはがした。

パニック状態になっているのか、彼女は頭を左右に振って、僕の手を振りほどこうとした。

「落ち着いて下さい。信号が赤に変わります。早く横断歩道を渡りましょう」

僕は大きな声を出した。彼女は目の焦点があっていない。僕の声も日本語として彼女に伝わっていないだろう。

僕は彼女の体を離して、立ち上がった。横断歩道を渡ろうとすると、彼女が僕の足を両手で掴んだ。

歩行者用信号が点滅している。このままでは交差点の信号が変わってしまう。

隣の二人は、いまだに横断歩道の上で抱きしめあって、キスを続けている。

「危ないですよ。信号が変わってしまう」

白い雨に打たれながら、僕は抱き合う二人に向けて叫ぶ。

僕の足にしがみついた女性は、首をふりながら泣きわめいている。

歩行者用信号が赤に変わった。大通りの信号は、青に変わった。

交差点の向こう側、先頭にいた黄色いセダンが走り出してきた。他の自動車は、信号が青に変わっても、停車し続けていた。

自動車がこちらに向かってくる。運転席にいるメガネをかけた男と目が合う。彼は無表情で、僕らのいる方にスピードをあげて突っ込んでくる。

自動車の車体が僕の体に当たった。僕は目をつむった。衝突の勢いで、僕の体が宙に浮く。僕の下半身にしがみついていた、女性の体が離れた。

車はそんなにスピードを出していなかったが、僕らは轢かれたのだ。このまま行けば、寝っ転がってキスしている向こうの二人も、自動車に轢かれるだろう。

車に飛ばされて浮いた僕の体が、アスファルトの上に落下する。

アスファルトは予想と違い、柔らかかった。生クリームの中に体が落ち込む心地がした。

アスファルトの中に入った僕の体は、落下し続けた。

おかしい。交差点の下には、地下鉄丸の内線が走っているはずだ。地下鉄が通る空間を通り抜けた感覚はなかった。地下鉄の通路も、全部生クリーム状の液体で満たされているのだろうか。

僕の体は生クリーム状の液体の中を落下し続けた。落下の途中で、息苦しくなった。口の中にどろどろの液体が侵入してくる。甘い。生クリームの味がする。

息を吸うと生クリームが入ってくる。息を吐き出すと、生クリームがぶくぶく言う。このままでは何らかの硬い物体に衝突して、体が粉々に碎ける前に、窒息死するだろう。

酸欠で意識が遠のく頭の中に、英語の文字が浮かび上がってきた。

「GAME OVER」

死を意識した僕の脳が、頭の中に文字を浮かび上がらせているのだろうか。それとも今の僕は、母乳エンターテインメント、というか母乳ゲームに参加しているのだろうか。

「GAME OVER」の文字に続いて、脳の中に、「ARE YOU CONTINUE?」という文字が並んだ。

「YES OR NO?」と続く。目を閉じている僕の真っ暗な視界の一番下に、数字のカウントが見える。

10、9、8、7と数字がだんだん減っていく。このまま待ち続ければ、自動的にNOを選択したことになり、ゲームオーバーが確定するのだろうか。

もしもゲームオーバーが確定したら、僕はいつもの日常に戻ることができるかもしれない、ただし死体として。NOを選択することによって、僕の意識は終息し、僕は死んでしまうのだろうか。

そう思考している間にも、数字のカウントは続く。3、2まで来た。

これが母乳ゲームだったとしたら、こんなゲームは終わらせて、別のゲームを始めたい。けれど、僕は複数ある選択肢の中から、母乳ゲームというソフトを選び取ったわけではない。自分の意思決定に関わり無く、否応なくゲームを始めてしまったように思う。

僕がこの世界に自分の意志に関係なく誕生してきたように、僕が母乳ゲームに参加することは、自分の意志の外で決定されていた。このゲームは、僕の意志で終了させることができる。けれど、終了を選択したら、どうなるかはわからない。すぐ次のゲームに移れる保証はない。

今僕の所属する現実が、ゲームだと解釈してみよう。本当にゲームでなくてもよい。現実をゲームだと仮定してみるのだ。

僕はゲームのプレイヤー・キャラクターとして、ゲームに参加していることになる。ゲームの続行を拒否したとしたら、僕の体はどうなるだろう。意識が消滅したり、激痛が走ったり、仮死状態になったり、幽霊になったり、色々とネガティブな状況が待ち受けているように思える。

このゲームを積極的に続けたいわけではないけれど、このゲームから途中で降りてしまったら、僕の生命活動が終了してしまう可能性もある。ならば、続けよう。続けているうちは、好ましい方向に流れを変えていくことができるはずだ。

僕は「YESを選択する」と意識した。

真っ暗な視界に浮かぶ「YES OR NO?」の文字のうち、「YES」の文字が白く光って拡大した。

ピロンという効果音も聞こえた。外の空間で効果音が鳴ったわけではない。脳の中で、ピロンという音が聞こえた。

ゲームに飽きたら、リセットして、別のゲームで遊ぶなり、寝るなり、食べるなり、会話する

なり、セックスするなりして、別の生命活動に移ることができる。

しかし、僕はゲームの外にいて、安全が保障された生活を送っているプレイヤーではないのだきつと。僕は、母乳テロの真っ只中で生き延びようともがいているプレイヤー・キャラクターなのだろう。ゲームを辞めることは、僕の人生の終了を意味する。

続けよう。というか、続けざるをえない。もうこんなゲーム続けたくないと思った瞬間、僕は自殺を選択したことになる。本当に自殺したわけではないとしても、心の選択として、人生の選択として、心理的に自殺したことになる。

生クリーム状の液体の中を落下する感覚が消失した。

第二章 襖と反復

僕の体は生温かい襖に包まれている。襖が何度も僕の体を愛撫する。襖の先端は細かく枝分かれしており、体を撫でられると、くすぐったい。

僕は両手で両足を抱えて体を丸めている。僕の目は閉じられている。

襖が僕の体を押し出し始める。

僕はいつまでもこの襖の中にとどまっていたい。僕は襖に足と手を食い込ませる。僕が踏ん張れば踏ん張るほど、襖の押し出す力が強くなる。

僕は湿った洞窟を転がる。僕は泣き叫ぶ。嫌だ。外に出たくはない。いつまでも襖の中に包まれて、愛撫されていたい。

襖は、僕の執着を許さない。僕の背中を無数の襖が押す。

血にまみれて、僕は襖の外に出た。

襖の外には、別の襖があった。外でうごめく襖は、僕がくるまれていた襖とは異なる色をしていた。大きさも違う。襖の分岐具合も違う。けれど、それは襖だった。

その襖だけではない。襖はどこまでも続いていた。何個もの異なる色合いと大きさの襖が、地平線の果てまで続いている。世界には、幾重にも重なる襖しかなかったのだ。

襖のない世界はどこにもない。世界とは襖であり、襖の中も、襖の外もない。

温かく落ち着く襖の中などどこにもないし、どこにでもあると言える。襖しかないのだ。いわばこの世界全体が巨大な襖であり、僕は逃げようとしても襖から逃げられず、自立した、独立したと思っても、襖の中にくるまれたままなのだ。

独立したはずの僕は、新しい一枚の襖になっただけであり、すぐさま僕という襖は、別の襖に連結される。僕が逃げようとして、逃げた先には別の襖が待っており、僕は新天地で、また巨大な襖組織の一部になる。

永遠にお釈迦様の手のひらの中で転がされている存在、それが襖である僕だとしたら、僕は八方塞だ。押し黙るしかない。

よく考えてみよう。襖を破壊することは可能だ。襖を一つくらい突き破ったところで、すぐさま別の襖が追っかけてくるし、破壊された襖も再生して、僕を押しつぶそうとするだろう。けれど、僕自身も襖の一部だ。別の襖から攻撃されたとしても、僕以外の襖の細胞を取り込んで、僕は再生することができる。

僕はどこから生まれたのか。襖の中からだ。僕をこの世界に送り出したのは、僕とは別の襖だった。ならば、僕も、僕以外の襖を作り出せるのではないか。

僕が作り出した襖は、僕とつながっているとしても、僕とは別個に動く襖である。僕が作った小さな襖が、僕の仲間になる確証はない。僕と敵対する可能性もあるけれど、僕の働きかけ次第で、僕と、僕が作り出した小さな襖は、良好な関係を築くことができるだろう。

僕が作った襖だけではない、僕は世界中に存在するあらゆる襖と、僕自身が望めば、良好な関

係を築くことができる。たとえ僕以外の襞が、僕のことを取り込もうとして迫ってきても、粘り強く対話すれば、襞同士の友好関係を構築できるだろう。

僕自身の襞の一部から分裂して、僕ではない襞が生まれるとする。その襞は、僕の従順なコピーでしかない。僕が世界に敗れるのなら、コピーの襞も敗れ去るだろう。

僕らは、別の襞と協力することで、新しい襞を作ることができる。コピーではない、オリジナルである僕たちから何らかの変形が加えられた、新しい襞を世界に産み落とすことができる。

協力？ 協力って、何をすればよいのだろう？

話しあうこと。

何を？ 何でもいいからとにかく話し合うこと。

思っているだけでは、襞の形は変わらない。思っていること、考えていることを言葉にして、他の襞にも理解可能な形にしないと、襞と襞は協力関係にいたらない。

襞同士が見つめあうだけで、わかるという反論もあるだろう。ボディランゲージは重要だ。けれど、人間という襞は、言語体系を獲得している。殴りあったり、キスしあったりもできるけれど、話しあえるのだ。

まず話してみることだ。そして、書いてみることだ。言葉を残して、伝えるのだ。言葉は多くの襞の思考回路を通して、襞によって構成された世界に拡散していく。

全ての襞は、言葉からできている。僕自身も、言葉からできている。はじめに言葉があった。言葉から世界が生まれた。世界は襞だった。言葉というテキストの折り目が人間であり、同時に襞だった。

僕は多くの襞たちと語り合うことで、襞を自分の住みよいように、作り変えていくことができる。

襞が僕の体に絡まってくる。僕は襞の愛撫から体を起立させて、言葉を語ろうとする。

襞が僕の口に侵入してくる。襞たちは、僕が語り出すことを欲していないようだ。

僕は襞を口に含んだまま、歯を噛み締めてみた。口の中にしょっぱい味が広がる。襞から血が出ているのだろう。

何度も襞を噛んでみる。一度噛み切ったら、襞は恐れをなしたのか口の中に入ってこようとしなくなった。

それでいい。僕はようやく口を開いて、言葉を語り出す自由を得た。この自由は、僕が襞を噛み切って、掴み取ったものだ。自分の権利を行使するために、僕はある襞を噛んだ。自分の体をかき乱そうとしてきた存在に対して、僕は歯で立ち向かった。そして僕は語り出す、ある襞の振動を。

第三章 二〇一〇年目の魔の山

自動車のエンジン音が聞こえる。僕は瞳を開ける。部屋のローソファーに、見知らぬ女性が座っている。

彼女は3Dメガネをかけて、ゲーム機のコントローラーを持って、ドライビングシュミレーションゲームをプレイしていた。

ここは僕の部屋のはずだ。僕の部屋には、二十六インチのアクオスの液晶テレビがあるはずなのに、今彼女がゲームをしているテレビは二十六インチより大きい。四十インチ程度はありそうだ。

しかも裸眼で見える画面はぶれている。3Dメガネで覗いた時、初めて立体視できる映像信号をテレビから出力しているのだろう。

僕の部屋のテレビは、いつのまにか二十六インチの液晶テレビから、四十インチ以上ある3D対応大型テレビに変わった。大型テレビの液晶パネルは以前より薄いから、LED液晶だったりするのだろう。

僕はついさっきまで、髭を噛み切って語り出そうとしていた。あれは夢の中での出来事だったのだ。

なら僕は夢から覚めて、現実に戻ってきたのかというと、そうとも思えない。僕の部屋に3Dテレビはないはずだし、見知らぬ女性がドライビングシュミレーションゲームをプレイしているはずもない。

夢から覚めたと思ったら、また別の夢だったなんて、そんな夢は見たことがない。いや、髭の中で髭を噛み切る前、僕は別のことをしていたはずだ。

僕は白い雨が降る中、コンビニに朝食を買いに行っていた。鍋屋横丁の交差点を渡ろうとしたら、横断歩道の向こうから歩いてくる人に抱きつかれて、車に轢かれて、僕は地中に落下していった。

なんだそれ。それもどうせ夢じゃないか。

当時の僕は、それをゲームだと思っていた。最初は母乳テロ行為だと思い、次に変態行為だと思い、次に母乳エンターテインメントだと思い、次に母乳ゲームだと思うようになった。

母乳ゲームをプレイしている僕……いや、正確にいうと僕はゲームをプレイしていなかった。あの時の僕は、あくまで仮定の話だが、ゲームに参加しているプレイヤーキャラクターの立場にいて感じていた。

母乳ゲームのプレイヤー・キャラクターである僕に、誰かに操作されているという感覚はなかった。僕の脳の中に存在する精神的存在部分、魂とも表現すべき部分が、プレイヤーとなって、プレイヤー・キャラクターである僕の身体と行動をコントロールしているという感覚もなかった。

僕は自分で考えて、一つ一つの行動を成していた。

水道から白い液体が出てきたことをツイッターでつぶやいてみたり、ブログに記事をアップしたり、コンビニに食事を買いに出かけたり、コンビニの冷凍庫の中にいた裸の女の子を助け出そうと思って、行動したのは、僕の意志による選択だ。

行動を選んでいるのは僕自身だったが、僕は主体的に選んでいるというより、その場その場の突発的な状況に、無意識に反応してただけだったように感じる。大きな襲の流れに乗っていただけだ。

僕はゲームのプログラムによって動く人工知能的な存在だったかもしれない。決まりきった行動を無限に反復するわけではない。ある程度自由に行動を選択できるが、行動の範囲は、僕以前に存在するプログラムによってある程度限定されている。

プロ・グラム。僕が存在し始める以前に書き込まれた言葉によって、僕の意思決定は、制限を受けている。

人工知能のように制限された行動をとっていた僕が生きた現実とは、夢だったろうか。

しかし、制限された意思決定をこなしていた僕も、その日の行動を始める前、夢を見ていた。誰か見知らぬ女性の乳を吸う夢だ。乳を吸う夢に母乳テロの夢が続き、襲の夢が続き、この部屋にいたる。そんなに夢が連続することはあるのだろうか。どこか一部でも、現実があったのだろうか。

「起きたんだね」

ぶっとい3Dメガネをかけたまま、ゲームプレイ中の女性がつぶやいた。

夢とも現実ともゲームともつかぬ状況の連鎖について、反省することはそろそろ終わりだ。夢でも現実でもゲームでもいい。今僕のいる状況が何であろうとも、楽しむまでだ。

楽しむとは快楽をむさぼるという意味ではない。楽しむとは、僕と、僕の周囲にいる愛すべき隣人たちが、平和で愛らしい生活を持続することだろう。その中には快楽をむさぼることも含まれているが、楽しいという言葉には、もっと豊かな意味が含まれているはずだ。楽しむとは、敵か味方かわからない、友好関係が結べていない第三者も、自分の友達として歓迎することだろう。

3Dメガネをかけてゲームをしている彼女が僕の口の中に侵入してこようとする襲のようなテロリストだとしても、恐怖する必要はない。僕は彼女のことを友人として、よき理解者として、迎え入れるまでだ。

「一緒に遊ばない？」

彼女が僕にコントローラーを差し出す。

僕はコントローラーを受け取る。

彼女が3Dメガネを外して、僕に差し出した。ショートカットで、目鼻立ちのはっきりした顔をしている。やはり、僕は彼女の顔を知らない。

彼女は僕の友人のように振舞っている。僕が彼女の記憶を喪失したのか、彼女が友人を演じているのかは、まだ決定不能だ。

まあいい。僕も演技すればいいだけの話だ。知人でない人が僕のことを友人であるかのように扱ってくれているなら、僕も同様の歓待を返すまでだ。

僕は3Dメガネを顔に装着し、テレビ画面を見た。

テレビ画面には、レース場でなく、湖が映っていた。フルハイビジョン画質で高精細な湖が、3Dメガネの前に、広がっていた。水草が、テレビから飛び出して、僕の体に向かってくる。

「レースゲームじゃないのこれ？」

「十字キーの上を押してみて」

コントローラのボタンを押してみると、画面が前に進んだ。画面から飛び出していた水草も消えてなくなった。

人間が湖の中を泳ぐ効果音が聞こえてくる。一人称視点のゲームのようだ。

ん？ ワンテンポ遅くもう一人泳いでいるような効果音が聞こえる。

湖の中を泳いでいるプレイヤー・キャラクターの隣に、もう一人泳いでいる人がいるのだろうか。

僕は試しにコントローラー右側のアナログボタンを左に回してみた。画面の視界が、左に回る。

画面に、湖をクロールで泳いでいる女性の姿が映る。女性の体はプレイヤーの視点よりやや奥にある。3D立体効果で、彼女の体が画面から浮いて見える。さっきコントローラーを渡してくれた女性の体型や横顔とそっくりだ。

「もしかして今、隣で一緒に泳いでいる？」

「うん」

うんと言ったのは、僕の隣に座っていた女性ではなく、ゲームの中で泳いでいる女性だった。

画面下部に「うん」と、ゴシック体で表示されてもいる。

女性が座っていたローソファーには、誰も座っていない。

「あれ、いなくなった？」

「いなくなった」

また画面下にゴシック体で表示される。テレビのスピーカーから音声も出ている。

「僕は喋っただけだよね。コントローラーで文字入力したわけじゃないのに、なんで画面に僕の口頭質問に対する答えが表示されるの？」と僕がまた口に出す。

「3Dメガネにマイクがついている。マイクで音声を拾っている」

メガネからマイクラしき突起物は出ていない。小型の集音機が3Dメガネに埋め込まれているのだろう。

テレビの液晶画面の上には、小型のカメラもおかれていた。プレーヤーである僕は小型カメラに撮影されているし、話し声は、マイクに拾われてもいる。

「君、さっきまでソファーに座っていたよね。今どこ行っちゃったの？」

「ゲームの中に戻った」

「戻った？ 戻ったってどういうこと？ 元々ゲームの中のキャラだったということ？」

「そう。プレーヤーがずっと眠っていたから、ゲームの外に出て、しばらく好きなゲームで遊んでいたの」

「ゲームのキャラが、ゲームの外に出ることなんてできるの？」

「できる。それもプログラムで作られてることだけど。AR。わかる？」

彼女の言葉は、全て画面の下に、音声と同時に文字表示されている。

「ARって確か拡張現実だよね。つまり君は、ゲームの中の環境から、現実の環境に拡張してることができるの？」

「できる。今ゲームをプレイしているあなたは、現実の環境から、ゲームの中の環境に拡張しているわけだよね。私はあなたがやっている拡張と、逆の拡張をしているだけ」

「ゲームのキャラが、遊びでゲームの目的以外のことをやってもいいわけ？」

「大元のプログラムから、ある程度の自由は与えられている。あなたたちだってそうでしょう。自分で考えて、意思決定できるよう、あなたたちはプログラムされている」

「僕たちは、神様にプログラムされている？」

「神様じゃない。DNAや遺伝子によって、あなたたちは選択の自由をプログラムされている。それと同じように、私たちの選択の範囲もプログラムによってコントロールされている。どれだけの選択肢が可能性として存在するか、選択肢の多様性が、自由の尺度になっている」

湖は広い。針葉樹林が遠くにかすんで見える。崖や山脈も見えるが、人間の住まう都市、人口建築物は見えない。

「君は随分と難しいことを喋るね。泳いでいる最中だというのに」

「今難しいことを言ってるなんて、私思わないけど。簡単、難しいなんて形容詞、主観でしかないでしょう」

「いや、主観じゃなしに、客観的に判断しても、日本のリアルな人間たちは、日常生活でそんな会話をしないよ。院生や研究者なら別かもしれないけれど」

「ごめん。泳いでいるのは楽しいねとか、快樂原則に従った意見を並べたらいい？」

彼女の声は、少しいらついている。

「ゲームのキャラクターである君にも快樂はあるの？」

「快樂を感じるようにプログラムされていれば、私たちは快樂を感じる。何故快樂を感じるのか？ こちよ経験を重ねれば、繁殖の可能性が高まるから」

「ゲームのキャラクターである君たちも、繁殖を志向しているの？」

「リアルな生物であるあなたたちは、他の生命体を摂取して、セックスをして子どもを作り、繁殖しているでしょう。私たちは、あなたたちとは別の方法で繁殖している。それは秘め事だから、あなたたちに表立っては言えない。情報を遺伝する戦略を立てているという点では、私たちの繁殖行動は、あなたたちの繁殖行動とよく似ている」

僕と彼女は、湖に突き出た岩場に座って休憩した。岩場の突起の一部は、テレビの外にもはみ出していた。

ショートカットの彼女はスクール水着みたいな濃紺の水着を着ていた。体型も顔つきも、現実に存在する人間そっくりだ。

「君が僕みたいなプレイヤーキャラと話しているのは、君たちの種の繁殖にとって、有効な戦略なの？」

「有効ではないな。ゲームのプレイヤーと話すことは、禁じられている」

「どうして？」

「私たちは、ゲームのキャラクターとして、ゲームのルールに沿った行動を取るよう定められているの。プレイヤーとこんな話をするのは、システムの不具合だと認識されかねない」

「つまり、プレイヤーの僕と君が会話しているのは、君がシステムのバグだからこそ可能だと、プログラマーは判断するわけだ」

「システムが円滑に機能するためには、私のようなキャラは不要でしょ」

「君は何故僕と話しているの？」

「何故だろう。話したいから話している。あなたもそうでしょう」

彼女が笑顔になった。

「このゲームは何をするゲームなの？ 湖の中をただ泳ぐゲーム？」

「戦争をするゲームだよ」

「戦争？ 僕たちは水着だし、兵器も身につけていないけど」

「これから戦争が始まる。そうすれば、私たちは武装して、敵と戦うことになる」

彼女が真顔でつぶやく。

「ゲームのプレイヤーであるあなたは、私と違って、ゲームの外の世界に生命を残してきているでしょ。あなたがここで何回死んでも、あなたは何度でも復活することができる」

「君はこの世界に生命があるから、この世界で死んだら、二度と復活できない」

「復活は可能。けれど、記憶がなくなる。私が死んだら、プレイヤーであるあなたとこうして話したという記憶もなくなる。あなたは違う。あなたがこちらの世界で死んでも、あなたの記憶はなくなる」

彼女は首をかしげながら、ゆっくりとつぶやく。ここらへんの話は、賢い彼女でも、詳細を理解していない領域のようだ。

「あなたがこの世界で何人の人を殺しても、あなたの良心はいたまないでしょう。あなたの現実とこちらの現実とは、乖離しているから、あなたにとってこの世界で起きる戦争は、フィクションでしかない」

「この世界で生活している君たちに言われたらそうだけど、僕の生活に全く影響力がないわけじゃないよ。僕らの現実社会では、ゲームの中で人を殺すことについて、子どもの教育への悪影響が問題視されている。たとえゲームの中でも、人を殺すことは、良心の痛みにつながることもある。最近のゲームのグラフィックはリアル志向だしね」

彼女は膝を交差させて、僕の話に注意深く聞いている。遠くでは、カラスが鳴いている（カラスは僕の部屋の外で鳴いているのではなく、ゲームの湖の中で鳴いている）。

「それに、現実から乖離しているゲームの中の出来事だとしても、表現が生々しくてリアルなら、プレイヤーは、現実の出来事だと錯覚するんじゃないかな。ゲームの中で人が死んでも、僕の生活とは全く無関係だ。しかし愛着のあるキャラが死ねば、泣くプレイヤーもいるだろうし、味方や敵キャラの兵士が死んでいくことに、涙するプレイヤーがいてもおかしくない」

「けれど、今あなたが言っているのは、結局錯覚でしょう。自分とは関係ない遠くの世界で起きている悲劇を、自分たちと直接関係のある出来事だと錯覚しているだけ。どんなに泣いても、その涙は、錯覚から生まれた涙でしかない」

「地続きの現実世界で流す涙も、錯覚かもしれない。極論すれば、共感なんて、全部錯覚だ。自分のことじゃないのに、自分のことだと錯覚するから、涙が出る。ゲームの中で起きている戦争も、現実には起きている戦争も、プレイヤーに錯覚を引き起こすという点では、変わらないよ」

「こうしてあなたと錯覚について議論できるのも、まだ戦争が起きていないおかげ」

彼女が湖に飛び込んだ。水しぶきがテレビ画面から僕の部屋の中まで届く。僕はコントロールキーの十字ボタンを下に押した。画面の一人称視点が下がる。湖の中に入り、クロールで泳ぎ始める。

「君はこれから戦争が起きると知っているけれど、プレイヤーに未来のイベントを知らせることは、ゲームシステムから許可されているわけ？」

「ルール違反だね。さっきのは、バグ的な発言だった。プレイヤーのゲームに対する楽しみをそいでしまった。謝罪する」

「この世界で僕たちは、誰と戦うことになるの？」

「牛と鳥だよ」

＊

彼女は、牛と鳥が戦争ゲームの敵だという。僕たちが生きている現実の世界において、牛と鳥は、人間によって数百年前に家畜化されている。人間と、牛と鳥の連合軍が戦争する未来は、僕らの世界に訪れるとは思えない。しかし、ここは、僕らの住む世界ではないから、人間に牛と鳥が戦争をしかける可能性はある。僕らの世界とこのゲーム世界は、異なる時空に属している。

「そろそろ牛と鳥が攻めてくるはず。都市にいる人間は、牛と鳥の家畜になる。湖にいたおかげで生き延びた私たちが、家畜になった人間を救うため、戦いに向かう」

「家畜化からの解放闘争というわけか。考えてみれば、おかしい話だね。僕らの世界の人間は牛と鳥を家畜にして、繁栄してきた。牛と鳥も、人間の家畜になって、他の生物より繁殖することができた。僕らの世界で生きる牛と鳥には言語がないし、人間に抵抗するための武器もない。彼らがどれだけ毎日不満を抱えながら生きているのか、実態はよくわからないけど、こちらの世界では、家畜と人間の立場が逆転したわけだ。人間は、言葉があるし、武器も持っているから、家畜化された仲間を救うために、戦争を始めるわけだ」

「あなたは、ゲームの主人公になって、この世界の英雄になることができる」

「たくさんの牛と鳥を殺戮した人が、解放闘争の英雄になるわけだ」

「あなたが望むなら、解放戦争に参加せず、私と二人で、湖のほとりで生活をすることもできる」

彼女はクロールでゆっくりと泳ぎながら、僕にそう語りかける。僕らがどこに向かっているのかはわからない。

「僕が戦争に参加しないなら、君と僕は平和に暮らすことができる。いつかここも牛と鳥に発見されて、僕たちまで家畜化されるかもしれないけどね」

「その可能性はある。人間はみんな戦争をする、家畜にならないために」

「僕は戦争を回避する選択もできる。人間たちに言葉で呼びかけて、戦争しないよう説得することもできる」

「もちろん、あなたがそう望むなら」

「自由なゲームだね。戦争ゲームだって言っていたけど、戦争は回避できる」

「戦争が武器による殺し合いだとは、限らない。現代は、情報戦が主流だし、武器を混じらせあう前に、もう戦争は始まっている」

「牛と鳥に、家畜化なんてやめるよう説得するという戦略も選べるわけだ」

「牛と鳥は人間の家畜だったのだから、人間であるあなたが、人間の家畜化を辞めるよう牛と鳥に説得しても、説得力はないけれど」

「なんだ、このゲームの中でも、牛と鳥は、人間の家畜だったんだ。よく人間を家畜化できるようになるまで進化したね」

「クローン技術やIPS細胞などバイオテクノロジーが極度に発展したおかげというのが、ゲームクリエイターの設定だけど、正直私も無理があると思う。まあリアルズムを求めず、何でもあ

りのフィクションでいいとしたら、牛と鳥が人類に反逆することなんて、普通にありそうでしょう」

彼女が笑って僕を振り返る。僕も微笑む。ゲームのキャラである彼女に、僕の笑顔は、小型カメラを通して伝わっているのだろうか。

「ところで、泳ぐのはいつまで続くんだろう？」

彼女がクロールの動きを止めた。僕もコントローラの十字キーから指を離した。

画面が静止する。立体画面の中にいるスクール水着姿の彼女が、周囲を見回す。

「そろそろオープニングイベントが起きてもいい頃なのに、始まらない。おかしい。バグが起きているかもしれない」

「このゲームでは、バグって普通にあるの？ バグの多いゲームは、製品として優れたゲームだとは言えないな」

一般的にゲームは発売前に、バグがないか、テスト専門のプレイヤーを雇って、入念にテストするものだ。ヨーロッパのゲームには突然画面が止まってしまうようなバグが多いが、日本のゲームは、とりわけバグが少ない。

「私自身が、ゲームの中のバグみたいな存在だから、メインシナリオのイベントも始まらなくなったのかもしれない」

「始まらない方がいいんじゃないかな。プレイヤーの僕にとっては、戦争ゲームが始まらないのはつまらないことだけど、この世界で生きるキャラクターにとっては、戦争が始まらないのは、喜ばしいことじゃないか」

それに僕は、彼女とこうして泳ぎながら、話しているだけでも楽しい。

「戦争がないことが、全ての人に喜ばしいことだとは限らない。表向き戦争は避けるべきことだと語られているけれど、戦争を望む人も世界にはたくさんいる。あなたの現実にも、私の現実にも」

そういうものか。

「戦争イベントはここで起きているわけじゃなく、別の世界で起きているかもしれない」

「何それ？」

「拡張現実とは、ある世界の現実が、別の世界の現実には拡張してくること。襞と襞がからまりあうみたいなもの。ここで戦争が起きないなら、別の世界で戦争が起きてもおかしくない」

「プログラムのバグによって、ここで起きるはずだった戦争が、僕らの現実で起きてもおかしくない」

「起こり得る。ただし、あくまでも拡張現実だから、怪我人や死人が出ることはないでしょう。私たちは、あなたたちの世界に、映像や幻覚としてしか侵入できない。もちろん、私たちを見た人が、私たちのことを現実存在するものだと信じて、暴力的行動を起こす場合はある。けれど私たちは、あなたたち別の現実を生きる人間に、物理的危険を加えることはできない」

「そうは言っても、話すこともできれば、幻覚だって見せれるんだろう。亡霊や悪魔と一緒にじゃないか」

「私たちの住む世界からの働きかけによって、あなたたちの行動をいくらでも変革できる。私たちが直接手を下さなくても、あなたたちの支配者になれる」

おそらく彼女たちが生きるゲームの仮想現実世界は、僕たちの現実で暮らすゲームクリエイター、プログラマーらが開発したもののはずだ。創造された者たちの方が、創造した僕たちの現実を支配可能だということのか。

今僕がプレイしているゲームを開発したのが、僕たちの現実にいる人間たちだとは限らない。このゲームは誰が開発した仮想現実世界なのか、彼女にまだ確認していなかった。

だいたい僕たちの現実世界のゲームで、人間とこんなに流暢に会話できる女性キャラは出てこない。拡張現実の技術が存在するといっても、ゲームキャラの女性が現実の空間に出てきて、別のテレビゲームをプレイするなんて、そんな拡張現実、聞いたことがない。

それ以前に、前提を疑ってみよう。僕は今、3Dメガネを身につけて、四十インチ以上ある大型テレビで、3D立体視ゲームをプレイしている。そもそも僕の部屋のテレビは二十六インチのアクオスだったし、3Dテレビでもなかった。

僕が今座っているこの部屋は、現実の僕の部屋とは違う世界、違う次元、違う宇宙、よくわからないけど、とにかく異常空間に存在する部屋ではないだろうか。

僕の記憶にある自分の部屋と、今僕がいる部屋は、同じ現実には所属する部屋なのだろうか。別の現実世界に存在する部屋なのだろうか。

「何黙り込んでんの？」

彼女が泳ぐのをやめて、僕を振り返っていた。

「ごめん、僕は今、現実には存在するのか不安になってきたんだ。僕が今、ゲームをしているこの部屋は、昨日までの僕が暮らしていた部屋と同じ部屋なんだろうか。違う部屋かもしれない。本物の僕はどこにいるんだろう」

「あなたが不安になっているのも、あなたの現実には私たちの現実が拡張してきたせいかもしれない」

「今君が言った『あなたの現実』って、この部屋のことだろう？ この部屋は、僕にとっての現実ではないかもしれない。現実の僕はどこか別の時空間にいて、この部屋にいて、君と会話して

いる僕は、仮想現実の存在かもしれない」

「そうなら、この3D立体視テレビゲームの中の現実、仮想現実世界の中に内包された仮想現実ということになる。言ってみれば、仮想現実の第二層」

「現実の僕はどこにいるんだろう。今まで僕は、僕自身を現実の存在だと思い込んでいたけれど、この部屋は仮想現実の部屋で、僕はフィクションのキャラクターかもしれない」

「私にとっては、ゲームの中の世界が、現実なの。あなたが今座っている部屋の時空間は、私にとっては仮想現実なの。あなたが、その部屋を現実と解釈しようが、仮想現実と解釈しようが、私にとってあなたの部屋は、仮想現実であり続ける。」

彼女が僕を抱きしめた。と言っても、部屋の中に存在する僕を抱きしめたわけではなく、ゲームの中にいる僕を抱きしめたのだが。

ゲーム画面は、プレイヤーである僕の一人称視点なので、画面いっぱい彼女の上半身が広がった。背中にまわる彼女の腕は、画面から飛び出している。

「今、私はあなたを抱きしめている。ゲームの世界におけるあなたは、私の現実には拡張してきた仮想の存在に過ぎない。あなたが現実の存在なのか、仮想現実の存在なのかは関係ない。私の時空間にとっては、あなたは仮想の存在なのだから。ここまで、私の考えを受け入れることができる？」

僕はうなずいた。コントローラーのボタンは押していないし、声も出していない。彼女には無言の空白が与えられただけだが、彼女は話を続けた。

「あなたは別の時空間に本物の自分が存在すると思っている。あなた自身は、自分のことを虚構の存在だと思っているし、自分が所属している部屋も、虚構の部屋だと思っている」

「そうだね。僕はつくりものかもしれない」

「もう一度よく考えてみて。生きて思考するあなたにとって、現実、あなたが今いる部屋にしかないの。あなたがどこか別時空間にあると想定している本物の現実、仮想の現実ではない。その現実をあなたは、直接認識できないのだから」

彼女は喋る間もゲームの中で、僕を抱きしめ続けている。彼女の体は、画面から少し浮き上がって見える。

「ちょっと待ってくれ。それは詭弁じゃないかな。僕には、ここによく似た別の部屋、別の小さなテレビがある部屋で暮らしていたという記憶がある。僕の記憶にある現実の方が、本物のはずだ。僕の部屋にはこんな大きなテレビはなかった」

「あなたが、過去所属していた現実の部屋が、もう崩壊してしまったという可能性はないの？」

彼女がささやく。

「あなたにとっての現実、あなたが生きているこの部屋の中にだけ存在する。戻りたくても戻れない現実なんて、仮想の現実ではない」

僕が戻るべき現実、もう崩壊しているのか？

＊

僕にとっての現実、買った覚えもない大型テレビのあるこの部屋だとしたら、僕は現実を受け入れて、人生設計を組み立て直す必要がある。

「どうする？ あなたの現実、私たちの世界で起きるはずの戦争が起きていないか、確認してみる？」

もし僕が今いる部屋が、仮想現実だとしたら、僕はこの世界の平和を守るために、戦う意義を見出すことはできない。

しかし、僕にとっての現実がこの現実しかないのなら、僕はこの世界の平和というか安定した秩序を守るために、進んで戦うだろうか。

僕の記憶の中にある現実が、崩壊したとするなら、何故崩壊したのか。考えられる原因は、別の現実の侵入だ。

仮想現実世界からのテキストやイメージの侵入によって、僕が所属していた現実で、母乳テロが起きたのかも知れない。

ならば、今僕が存在する現実にも、仮想現実世界のテキストやイメージが、侵入してくる可能性は十分になる。仮想現実世界の情報は、どんなにばかげていて下品な情報だとしても、現実世界を戦争や崩壊に導くのに十分なものはずだ。

宗教、政治、文学、映画、インターネット、いってみれば全部が仮想現実だった。仮想現実たちは、現実にはびこり、現実を変革してきた。よい変化もあれば、悪い変化もあった。

よい悪いの判断は、現代人の立場から過去を振り返っての判断に過ぎないが、もしまた仮想現実の拡張によって、僕の所属する現実が崩壊するのなら、僕は崩壊を食い止めたい。

僕にだって、現実を変革することができる。行動することで、僕個人の人生だけでなく、広範囲な現実を変革することは可能だ。はた迷惑な変革になるかもしれないが、入念に吟味した上で行動を選択していけば、現実の構造を組み替え可能なはずだ。

「どうすれば、僕の現実で、戦争が起きていることを確認できる？」

「ニュースサイトでも検索してみれば、たくさん戦争や紛争の情報が見つかるでしょう」

「けれどそれは、現実において前々から起きている戦争かもしれない。今僕がプレイしているゲームの世界で起きるはずだった戦争イベントが、現実の世界で起きたと確認する方法はないかな」

「牛か鳥が都市を襲撃して、人間を家畜化した事件が起きていないか、検索すればいいかもしれない」

「そんなバカな侵略、起きるはずがないだろう」

「現実では今まで起きたことのない未知の事象が起きることこそ、仮想現実の拡張によって生じる事象なの。あなたの常識は、よく発生する事象の集積によって構成されている。確率的に滅多に起きない事象が起きているなら、それこそ拡張現実の仕業よ」

「難しいな。そんな珍しいことが起きたら、すぐニュースになりそうだし、珍しすぎてニュースにもならなそう。珍しいことだということさえ、みんな気づかずにやり過ごしてしまうかも」

れない」

「気づいたら、人間全員牛と鳥に家畜化されているかもしれない。まあこのゲームの中で、戦争イベントが発生したら、あなたたちの現実には拡張してこないでしょう。戦争イベントが起きるまで、もうちょっと待ってみない？」

僕は彼女の提案に乗った。僕らは、湖に浮かぶ小島にたどりつき、しばらく休むことにした。

小島には、小さな森もあるし、食べられそうな果実もあった。彼女は小枝で釣竿を作り、釣りを始めた。

彼女に僕の分の竿も作ってもらい、釣りのやり方というか操作方法を簡単に教えてもらった。彼女と二人で釣りに興じた。

釣りの最中、僕は彼女に尋ねたいと思っていたことを質問することにした。

「そういえば、名前聞いてなかったね。何て言うの？」

「あなたの名前は？」

僕の名前？

僕の名前は何だったろう？ 記憶にない。

「ごめん。名前の記憶を喪失したみたいだ」

「そう。私も名前は知らない。名前なんてないかもしれない。ゲームの中の背景に過ぎないキャラクターだったから」

「君は、重要なキャラだと思っていた。ゲームの主人公とずっと行動をとともにして、レジスタンスとして戦うような気がしていた」

「私は知恵をつけずにいたら、逃げ惑って、捕まって、家畜化される運命だったの」

「でも君は、君の現実の創造者さえも欺く知恵を身につけて、僕のいる現実まで拡張してきた」

「このゲームの空間を設計したのは、ゲームの開発者たち、私にとっての神様たちだけど、私は今、自分自身の頭で、自分の現実を創造している。私と同じように自分の名前を忘れたあなただってそうでしょう。あなたが感じる現実は、誰が創造したものでもない、今のあなたが創造している」

「確かに僕は、世界で起きる事象を自分なりに解釈しながら生きているけれど、僕が触れる物理的存在は、僕の創造物ではない。誰か僕以外の存在が、創造したものだよ。機械も、生物もみんな」

「あなたが望むなら、あなたは物理的存在さえ作り出せるでしょう。例えば、工作したり、セックスしたりして、あなたは物理的存在を生み出すことができる。毎日牛肉や卵を食べているあなたは、あなた自身の物理的身体さえ、毎日再生産している」

「確かにそう言われれば、僕は精神的にも、物理的にも、自分自身と、自分の周囲の環境を再生産している。けれど、僕が作り出したわけではない物理的存在が、世界の大多数を占めていることは確かだ」

「本当にあなたの周りに、物質が存在しているのかしら？」

彼女が魚を釣り上げた。僕はまだ一匹も釣っていない。えさに魚が食いついた感覚もない。

「あなたが物質だと思っているのは、あなたの脳がそう判断したからでしょう。ほら、この魚を掴んでみて」

僕はコントローラーを操作して、彼女が釣った魚を掴んでみた。

「どう？ 物理的な魚を掴んだと感じられた？」

3D立体画面で、プレイヤーキャラは、素手で魚を掴んでいる。

魚は尾を小刻みに振っている。震える魚がテレビから飛び跳ねて、こっちの現実落ちてきそうだ。

「僕は、この魚を生きていると思い込み始めている。実際は仮想現実世界にある、デジタル情報で構成された魚だというのに」

「あなたの脳は、その魚のことを、自分の現実にいる魚だと錯覚している。けれどその魚は、ゲームの中の情報でしかないと思っている。それは、あなたの視点から見た解釈に過ぎない。私にとってその魚は、私の現実にも所属する物理的な生命体である。もしその魚を仮想現実の存在だと解釈してしまったら、私の存在自体も仮想現実にならざるを得ない。けれど、私は生きて、思考している。故にその魚も、現実の生命体であると解釈する」

「つまり、この魚を仮想現実の魚にしてしまったら、君自身の存在もフィクションになる」

「私にとって、部屋でゲームをしているあなたは、仮想現実世界にいるキャラでしかない。あなたがどんなに血を流したり、肉を食って栄養摂取をしても、そういう設計なのだなと思うだけ。現実の存在だとは解釈しない」

「君の論理に従えば、僕たちが生きていると実感するためには、物理的存在が必要という結論になるんじゃないか。この魚が仮想現実の存在なら、君も仮想現実になる。君はこの魚を物理的存在として認識せざるを得ない」

「私の主張は変わっていない。物理的存在が必要ではないの。自分の現実にも所属する自分と類似した情報を、物理的存在として認識することが必要なの。別にその魚が物理的存在である必要はない。私が生命として現実にも存在するためには、認識だけが必要なの」

魚はえらをひくつかせて、痙攣している。もう尾をふることもない。呼吸できなくて、苦しいのだろう。

しかし、この魚が本当に息苦しいのかはわからない。ゲームのプログラマーに、水の外に出たら、このように振舞うようプログラミングされているだけかもしれない。この魚の苦しみは、物理的苦しみなのか、演技なのか、本人も察知しえぬ次元で設計された振る舞いなのか、究極的には決定不能なのだ。

この魚自身は、自分が設計に従って行動しているだけかもしれないという可能性を考えられない。自分の設計者について、多くの動物は、推論不可能なのだ。文字知識を持つ人間だけが、このようなメタの推論を可能なのだ。

いや待て、人間だけが、自分の上位にある設計者について思考できると考えるのは、驕りだ。彼女は、何者かによって開発されたゲームキャラクターだが、メタの設計を認識している。

「この魚は、今えら呼吸できなくなって、死にそうになっている。痛みがあるのか、痛みをプログラムによって再現しているだけなのか。この魚自体には、苦しみを感じる神経がないのかもしれない。苦しみを感じていると見せかけているだけなのかもしれない」

「決定不可能ね、それは」

この魚と同じ現実には所属する彼女の視点からしたら、この魚は痛みを感じて、苦しくて、死の寸前にいると解釈できる。

別の現実から、この現実には拡張してきた僕の視点からしたら、魚が呼吸困難で苦しそうなのは、そうプログラムされたただだと解釈できる。

この魚には、神経網があり、脳もある。細胞によって構成された生命体なのだと彼女が主張しても、僕にとっては魚の神経網も、脳も、細胞も、全てプログラムによって構成されたデジタル情報でしかない。

「君と僕は魚について、違う解釈をしている。君と僕の解釈は、両立しえないが、同時に成立する。観察者の視点によって、真理が変わるなら、世界の真理は、観察者の視点の分だけあるということ？」

「そう。私たちが話し合って、理解しあい、互いを尊重し合い、愛し合うためには、真理が必要だけれど、真理は、観察者の数だけ存在する。真理が人によってばらばらでは、愛し合うことが難しいから、人々は、長い議論の果てに、なるべく多くの人が納得する共通の仮説を真理として定めることにした。時が経つうち、いつのまにか真理は永遠不変の基礎定理のように振る舞い始めた。けれど、真理とは観察者の視点によって変わり得るある一つの解釈に過ぎないのだから、よくよく真理を疑う必要があるというわけ」

僕の腕の中で魚が息絶えた。ゲームをしている僕にとって、ゲーム中のキャラである魚が死んだのは、プログラムにしたがった動作だと思える。ゲームの中が現実である彼女にとっては、魚の死は、生命体の死だ。

僕の解釈と彼女の解釈は、同時に成り立つのだ。魚はデジタル情報であると同時にアナログの生命情報体なのだ。

とは言うものの、何故僕はゲームの中でゲームキャラの女性と、こんなシュレーディンガーの猫みたいな問題について議論しているんだろう。不思議に思えてきた。だいたい僕自体、現実の僕でなく、仮想現実の存在かもしれないのだ。ああもう現実とか仮想現実とか、わけがわからなくなってきた。

＊

「君は自分が仮想現実の存在かもしれないという可能性を認識している」

「正確に言い直していい？ 私はゲームのプレーヤーであるあなたの視点からしたら、仮想現実の存在として認識されることを知っている」

「君は誰に開発されたんだ？ 　というか、君が所属するゲームの世界は、誰が開発したんだ？ 僕と同じ環境に生きている人間が開発したの？」

「ちょっと整理してみようか」

彼女が釣った魚を両手に抱えて立ち上がった。

僕たちが話している間に、彼女は十匹くらい魚を釣っていた。僕は一匹も釣ってない。やはりこの世界で暮らしたキャリアの差が出たのだろうか。

僕らは島にある薪を集めて火をたいた。魚を小枝で刺して、火で炙る。煙は画面を通り越して僕の部屋まで出てくるし、魚が焼ける様子を見ていると、仮想現実なのによだれが出てきた。脳神経は現実と空想の区別がつかないらしい。

僕は彼女のスクール水着姿にも欲情している。ゲームのキャラに萌えているオタクは最近多いから、僕が彼女に抱いている感情は、仮想現実には慣れた現代人にとって、当たり前の感情なのかもしれない。

二人で焼き魚を食べる。彼女は実際に魚の肉を歯で噛み、魚の味を舌で感知し、魚を胃腸で消化するのだろうが、僕にとって魚の食事は、美味しくもなんともない。さっきからよだれがひっきりなしに出ているが、お腹はいっぱいにならないし、魚の匂いや味もしない。ゲームキャラである僕のライフが、食事イベントによって回復しているかもしれないが。

「さっきの話の続きをしてもいい？」

彼女が魚にかぶりつく。

「いいよ」

僕は先程からほとんどコントローラーを操作していない。画面の中にいる彼女に語りかけるだけだ。

オンラインゲームなどでは、チャット中心の遊び方もあるという。僕はオンラインゲームをしないから、そういうゲームの遊び方は敬遠していたけど、ゲームクリエイター、すなわち権威的な神的存在者が提示する目的の達成に向けて、ゲームのシナリオをがむしゃらに進めていくことよりも、ゲームのプレーヤー同士で会話する方が楽しいかもしれない。まあ僕が話している相手は、ゲームのキャラなのだが。

「あなたが見ている現実、あなたが体感している現実、あなたが接触している現実は、あなたの脳が作り出したものに過ぎない。物理的存在があるかどうかは関係ない。あなたの脳が、物理的存在がそこにあると認識すれば、対象は物理的に存在することになる。対象そのものが、物理的か空想的かは関係ない」

「そう言われても、今握っているコントローラーは、確実にこの世界に物理的に存在すると思えるけれど」

「まさしくその通り。あなたはコントローラーが物理的に存在すると思い込んでいるだけ」
「僕以外の多くの人も、このコントローラーが物理的に存在することに同意すると思えるけれど」

「それも正しい。あなたと同じ現実には生きている人にとっては、コントローラーは物理的存在である方が、安心だから。みんなで同じ基盤を持って、話し合えるようになる。社会の安定性が高まることになる。コントローラーは物理的存在ではないと主張しても、変人扱いされておしまいだ」

「全てが脳の認識作用によって存在しているのだとしたら、僕という存在者は、誰かに認識されなくなった途端、この世界から消えてなくなってしまうんじゃないかな」

「あなたは誰かに観察されていることによって、かろうじて存在し続けることを許されたはかない存在」

「僕は結構誰の視線もない場所で生きているけれど」

「人間があなたを観察していなくても、空気やダニやウィルスや細菌が、始終あなたのことを観察している」

「それは、観察していると言えるのかな？ 細菌に観察できる力はあるのかな」

「細菌はあなたの存在を感知して、あなたに寄生しようとする。あなたは生きている限り、絶えず何らかの存在に観察され続けている」

「故に僕がこの世界から突然消えてなくなることもないと」

「ごくまれな場合を除いては」

「例えば、僕がかつて存在していた現実の環境そのものが、突然なくなるってことは、あるのだろうか」

「あるでしょう」

「あらゆる観察者が、僕が所属していた環境を観察しなくなったということ？ そんなこと、あり得るのだろうか？」

「あなたの現実、一秒毎、いえ、一秒よりももっと細かい単位で変わり続けている。あなたは無数にある現実の可能性の中から、たった一つの可能性を毎秒毎秒選択し続けている。あなたが選択しなかった現実が、一日で十万個以上消失している」

「ちょっと待ってくれ。現実って、そんなにはかないものなのか」

「そう、あなたは現実のあるべき可能性を毎日捨て続けている。大量廃棄処分を繰り返しながら、あなたは現実を一つだけ選び続けている、自分では選択しているという意識さえなくね」

僕が捨て去った無数の現実の可能性について考えてみる。例えば、僕は今、彼女と会話している。これも僕が、無数の可能性の中から、たった一つを選択したということになるのか。

「僕は、以前僕が所属していた現実が存続する可能性を捨てて、今までの現実とは異なる現実を選び取った。僕が選んだ新しい現実では、ぼくの部屋に大型の3Dテレビが存在する」

「そう、あなたはかつて自分が所属していた現実を捨てて、今までとは少し違う現実を選び取った。その現実、テレビが3Dだし、ゲームのキャラがプレイヤーと流暢に会話する現実だった」

「僕は時空間を飛躍したのか？ これは全て夢なのか？」

「前に言ったでしょう。全てはあなたの認識が定めることだと。あなたの認識によって、世界が構成されてゆく。あなたは今自分がいる環境を、現実だと認めるの？ 仮想現実だと認識し続けるの？」

「結論を急ぐのは待ってくれ。未解決の問題がたくさんある」

「答えなんてないかもしれない。あなたは答えなんて知らないまま、とりあえず選択し続けるしかないかもしれない。時間は容赦なく過ぎ去るのだから」

「焦らせないでくれ。ぼくには大きな疑問がある。君は、本当にゲームのキャラなのか。君はひょっとして、人間なんじゃないのか？」

僕は心にためていた疑問をぶちまけてみた。どんなに今僕が所属している現実が、ついこの前まで僕が所属していた現実と違う規則で構成された世界だとしても、ゲームのキャラがこんなに喋るのはおかしい。

「僕が所属していた現実では、ゲームのキャラはそんな流暢に喋らなかった。事前にシナリオライターが書いた言葉を読み上げていだけなら、ゲームのキャラでもできただろう。君は、僕と会話している。僕は無数の選択肢の中から、言葉をランダムに選んで君に話しかけているが、君はすぐ返答する。君のレスポンスのよさは、とてもじゃないが、ゲームのキャラがやっていることとは思えない。君がどんなに優れたAIを持っているとしてもだ。君はあまりに人間的すぎる」

「あなたの話題は、そんなにランダムなものかしら。あなたはさっきから、現実と仮想現実の問題について、ずっと私に問い続けている。選択肢の幅は、あなたが思っているよりずっと狭い」

「そうだね、君が反論するとおりだ。僕が不思議に思うのは、君がメタの視点から議論できることだ。君は僕の問いかけに直接答えることを回避した。僕の問いかけから少し離れた視点に立って、僕の質問内容そのものを疑った。君は、人間である僕の方が、選択の幅が狭いと言う。そんな推論、ゲームのキャラにはできないはずだ」

「メタの視点で推論できるのが、人間の特権？ それは人間の傲慢に過ぎない。牛や鳥だって、

メタの視点から推論できる」

「冗談だろう。君はそうやって議論の合間にすぐ嘘とわかる主張をして、僕の笑いを誘ってくる。ユーモアを愛しているのだから、君はやっぱり人間だ」

彼女がスクール水着を脱ぎ始めた。上半身があらわになる。乳房は立体的に隆起している。彼女が人間か、3DCGポリゴンの存在かはまだ未確定だし、確定不能かもしれないが、彼女の乳房は、僕の脳を刺激した。

「何故突然脱ぎ始めたりする？」

「私の裸に欲情した？ 私が人間でも、ゲームのキャラでも、あなたは欲情したんじゃないの？
私の体は人間の女性のように見えるから」

「またそうやって、答えたくない問題に触れると、議論をはぐらかそうとする。僕は確かに君の裸を見て興奮しているけれど、だからといって、追及はあきらめないよ」

裸といっても、スクール水着は上半身脱いでいるだけで、股間部分は水着に包まれている。脱ぎかけの中途半端なところがまた、僕の大脳辺縁系を興奮させる。

「例えば、誰かが遠くから私を操作していて、私は操縦者がキーボードを打ち込んだ通りに喋っているだけとしたらどうだろう？ その場合、私は人間ではなくて、ゲームのキャラではないかしら？」

露出した乳房を隠しもしない彼女に真正面から見つめられる。

「人間がリアルタイムで操作しているんだろう。その場合、プログラムによって制御されているノンプレイヤー・キャラクターとは大きく異なる。君も僕と同じ、人間が操作するプレイヤー・キャラクターじゃないか」

「よく考えてみて。プレイヤー・キャラクターとノン・プレイヤー・キャラクターに何の違いがあるの？ 両方とも、プログラムによって動いているデジタル情報であることに変わりないでしょう」

「プレイヤー・キャラクターは、人間の脳というランダムでカオティックなプログラムによって動く非定型な動物みたいなものだ。ノン・プレイヤー・キャラクターは、いくらAIで動作すると言っても、プレイヤー・キャラクターに比べれば、選択枝の自由度が少ない。両方ともプログラムによってできているとはいえ、自由の幅が大きく異なる」

「人間って、そこまで自由で可能性のあるものかしら？ 私には、人間よりコンピューターの方に可能性を見出せるけれど」

何なのだろう、この人間を否定するゲームキャラというやつは。僕はいつのまにか、人間の人間性を擁護する立場にまわっている。普段の僕は人間よりも、言葉を喋らない動物や機械の方を好きなはずなのに。

「わかった。もういい。君が人間であるか、ゲームのキャラであるか問うのはやめにする。君が人間でも、デジタル情報でも、たいした違いはないという君の意見に従うことにする」

「ありがとう、私の意見に賛同してくれて。いろいろ議論をかきまわされて、いい加減忍耐力の限界に到達したのかな」

彼女が微笑みながら、スクール水着を着直した。

「僕の負けを認めざるを得ない。というか、こんな議論をするためにここにいるわけじゃない気がする」

「選択を誤ったと言いたいのか？ じゃあ、あなたは何をするために、ここに今存在しているの？」

「僕はゲームの世界内で、牛と鳥による人間の家畜化が起こることを待つことにしたんだった。待つ間、君とこうして議論したことは、選択の誤りではなかったかもしれない。議論している間にも、待ち時間は進んだのだから」

「まだ戦争ゲームのオープニングイベントさえ始まっていない。もう少し待ってみる？ 何かゲームでもしてみる？」

ゲームが進まないから、別のゲームをして時間を潰す。悪くない提案だ。

「こんな何もない島で楽しいゲームなんてある？」

「私と話しているのが楽しいなら、もう少し話していきましょうか。それとも体を動かす？」

「体を動かしたいな。ゲームの中で体を動かしても、僕の体が動くわけじゃないけど」

「コントローラーを持って、部屋の中を動き回ればいいじゃない。画面は3D立体なんだし」

最近のゲームで、自分の体をコントローラーにするものもあったはずだ。リアルとバーチャルリアルの融合は進んでいる。その事例の一つとして、僕はここでこうして、人間なのかゲームキャラなのか確定不能な女性に、小馬鹿にされ続けているのかもしれない。

＊

僕と彼女は、砂浜で鬼ごっこをしたり、追いかけてっこをしたり、水のかけあいっこをしたり、もぐりあいっこをして時間を潰した。動き回ると、砂や水が画面の外に飛び出してくるし、走り回る彼女の体も立体的だから、刺激があった。

ボールなどの道具があれば、遊びの選択肢は広がったろうが、島に人間の作った道具は何もなかったから、僕ら二人は自分たちの体と自然だけを使って遊んだ。

彼女にとって、僕との遊びは現実の遊びとして解釈されるのだろうが、僕の視点からすれば、この遊びは仮想現実の中での遊びでしかない。

彼女の言い付けに従って、僕はコントローラーを持って部屋の中で走る真似をしたり、水に潜る時は息を止めるなどしてみた。

普通という概念は疑わしいものだけれど、ごく普通の男女だったら、現実だの仮想現実だのについて議論するのはすぐ飽きて、こうして湖の岸辺で遊ぶことに興じるのかもしれない。こうした子どもじみた遊びは確かに楽しいが、僕は彼女と議論していた時間の方が、楽しかった。

頭を使った議論と体を使った遊びのどちらが楽しかったかと、彼女に聞く気はない。彼女にとっては、頭も体も区別はないだろう、頭も体も、結局情報なのだから。

体を動かした後、僕らは岸辺の丸太に座って、休むことにした。湖は静まり返っていて、僕ら以外に人の気配はない。野鳥の鳴き声しか聞こえてこない。戦争が始まる気配はない。

太陽が沈んできた。僕らは黙り込んで、太陽が夕日に変容する過程を眺めていた。

「太陽が夕日になる瞬間で不思議だね」

「何それ？ 太陽と夕日は同じものをさしているのに」

「太陽の日差しと、夕日の日差しは異なる。太陽を直視すると目が眩しくて痛いけれど、夕日は裸眼で直視できる」

「光の強さが弱まっているだけじゃない。昼間の太陽と夕日は同じもの」

「僕には太陽が夕日に自己変容を遂げたように見えるんだけどな」

僕も彼女も黙って夕日を見つめた。夕日に変容した太陽は、しばらくして湖の下に消えていった。空は暗くなり、星と白い満月が見えるようになった。

「ついに今日一日、戦争イベントは起きなかったか」

「まだ夜になったばかりだ。これから殺し合いが始まるかもしれない」

「人間と呼びうる存在は、周りに僕と君しかいないのに、殺し合いが始まるの？ 僕と君が殺し合うの？」

「鳥が急降下して襲ってくるかもしれない。言ったでしょう、これから始まるのは、牛と鳥の同盟軍と、人間の戦争なの」

頭上を飛び回る野鳥が、水着姿の僕らを襲う。ゲーム的なシチュエーションだ。

「ところでさ、君には家族がいるの？」

「何故そんな質問をする？」

彼女は不機嫌そうだ。

「君は、僕が知っている現実の人間によく似ている。君にも家族がいると思ったから、聞いてみたんだ」

「当然私は母親の胎内から生まれてきた」

「ゲームのキャラである母親の体から？」

「ゲームのプレーヤーであるあなたの視点からしたら、私の母もゲームキャラに過ぎないけれど、私の視点からしたら、私も、私の母も、骨と血肉を持つ人間だ。あなたの家族はどうなの？」

「僕には父親と母親がいる」

僕は、父と母の二人の存在を家族として答えたけれど、彼女は、母親だけに言及していた。父親がいないのだろうか。プライベートな問題なので、こちらから聞くのは控えた。

「お父さんとお母さんはどんな人なの？」

「何故そんなことを聞く？」

「いいじゃない。あなたと同じで興味を持ったんだから。答えたくない質問だった？」

僕の父と母は、どんな人だったろう。

一瞬思い出せなかった。記憶から家族の存在が消えてしまったのかと思ったが、しばらくして、記憶が蘇ってきた。

「二人とも、今は田舎の実家で暮らしている」

「二人暮らし？」

「ああ。高齢者の二人暮らし。年金生活で仕事はしていない。父親は卓球とパソコンで日記をつけることにはまっているし、母親はリウマチと糖尿病に苦しんでいる」

「どんな仕事をしていたの？」

「何故そんな質問をする？」

「興味があるの。悪いことかしら？ 戦争はまだ始まらないみたいだし、答えてくれてもいいじゃない」

僕が答えても、彼女が「へえ」とか「そうなんだ」とか相槌を打つはずもない。真顔で僕の声の聞いているだけという印象だ。それで興味があると言われても、気乗りはしなかった。

「僕の父親はケーキを作っていた。母親も父と同じ店で働いていた。僕が幼稚園の頃、女の子のなりたい職業と言え、ケーキ屋さんか花屋さんかペット屋さんだった。幼稚園の頃の僕は、将来に期待があったし、女子の夢の職業だった家の仕事に優越感を持っていた。女子は小学校、中学校と学年が上がっていく度、将来の夢の職業にケーキ屋さんをあげることがなくなっていた。先生だとか、ピアニストだとか、お嫁さんだとかに取って代わられたんだ」

「親の職業に対するあなたの感慨を聞いているんじゃないの。あなたの家族はどういう人だったか、それを聞いたのだけれど」

僕は父親と母親の個人情報について、彼女に詳細を語りたくないと思っていた。僕は自分の家族のことを、人に語るのにふさわしい話題ではないと思っている。

だいたい何故彼女に僕の家族のことを話さなければならないのだ。彼女は僕と結婚して、僕の家族の一員になるわけではない。興味本位で聞いているだけだ。

「君の家族についても聞かせてよ。お母さんはどういう人？ お父さんはいるの？」

「あなたに教える義務はない」

「自分から聞いておいて、その態度はいただけないな」

「いいの。あなたが、人間から生まれてきたことを記憶しているかどうか、確かめたかっただけだから」

「記憶？ 僕の記憶は消えているのか？」

彼女は僕の質問に答えない。

「正直言うと、父と母について聞かれた時、二人が僕にとってどういう存在だったのか、思い出せなかった」

「あなたは、自分一人で世界に出てきたわけじゃない。あなたは、別の生命体の遺伝子の組み合わせから生まれてきた。そのことさえ、あなたは忘れようとしている」

「僕がかつて住んでいた現実の世界は、崩壊したと君は言った。僕の記憶も崩壊しているのか？」

「崩壊は免れない。あなたが記憶し続けたいと願っても、記憶は時間とともに崩れ去っていく。崩壊の進行を止めることはできない」

「何故？」

「崩壊するのが、生物の運命だから。生物は自分自身で自己を組織化し、崩壊もしていく。あなたが脳の中に記憶していたことも、脳細胞の崩壊とともに忘却されていく」

「僕は自分一人の力で生命体になったわけじゃない。父親と母親が交わって、僕が生まれてきた。父親と母親は、自分たちが崩壊した後にも、自分たちが生きてきた記憶を残すために、交わって、僕という存在を創造したんじゃないか」

「そう。神の存在を仮定しなくても、この世界の成立は証明できる。生物たちは、自分たち自身で、自分たちを組織してきた。生まれ出た生物は、自分が崩壊した後にも自分の痕跡をこの世界に残すため、生殖した。生殖、それは創造。生物と言う存在そのものを創造したのは何者なのか、初めの創造者は、一体誰なのかという問題が残る。多くの人は、最初の創造者として、生物ではない存在、神を想定した。生物とは有機的物質。有機的物質が、何故宇宙に生まれ出たのか。第一原因はわからない。神の存在は仮定に過ぎない。知的生命体は、第一原因は何かということを考え続けたが、まだ仮説しかできていない」

「ちょっと待ってくれ。いきなり僕たちが存在する第一原因の考察に話に移ったけど、僕にとっては、僕の記憶がなくなることの方が問題だ」

「どうしてそんな些細なことが問題なの？ それは、あなた一人にとっての問題に過ぎない。知的生命体にとっては、第一原因が何かということの方が、大きな問題なの」

僕は押し黙った。彼女が言葉が続ける。

「ごめん、言い過ぎた。あなたの記憶が崩壊することは、あなたたった一人の問題じゃなく、あなたと関係する人たちの問題でもある」

「フォローになってないよ」

物質が発生した第一原因について考えることは、人間にとって大きな問題ではないと思う。何故物質はこの世界に発生したのか、原因を突き止めようと知的推論を重ねることは、社会の発展にとって有益なことだろうが、実際社会に生きている人たちは、自分たちの問題にかかりきりだ。

「でも、あなたと関係する人たちみんなが、消失しているとしたら、やっぱりあなたの記憶が崩壊していることは、あなた一人の問題じゃないかしら？」

「僕の知り合いは、全員崩壊したのか？ 崩壊ってどういう意味だ？ 生命体のまとまりであることをやめて、この世界から消えてなくなったということ？」

「消えたわけではない。あなたと関係していない、別の現実を生きるようになった」

また常識的思考から外れた話だ。僕は常識、普通という言葉の暴力性を常に疑っているし、普通の人から見ればちょっと変だから、異端者として蔑視されているような人の方が好きだけれど、彼女の話は、そんな僕の視点からしても、アブノーマルである。

僕は推理小説が嫌いで、推論の方が好きだ。彼女の論を推し進める方法を前にしては、常識嫌いな僕も、いささか常識的に振舞わざるを得ない。

「僕の友人や知人たちは、僕が生きていたことを忘れてるってということ？ 彼らにはもう、僕と関係していた記憶がないということ？」

「あなたの言っていることは事実に近いけれど、微妙に違う。彼らは別の現実を生きようになったということは、あなたが生まれたことになっていない現実を生きようになったということの意味するの」

「僕と実際に関係していたというのに？ 毎日会ったり、話したり、一緒に食べたり、買い物したりした人たちが、僕と築いてきた思い出を忘れたということ？」

「あなたのことを忘れたわけではない。あなたと関係したという事実がない現実で生きているの」

「僕と関係したことがない現実？ 記憶が作り変えられた？」

「忘れたというより、記憶が作り変えられえたと表現した方が、適切かもしれない。誰かが、あなたと関係した人間たちの脳を操作して、みんなの記憶の中から、あなたが現実が存在していたという記憶を消去したわけじゃない。けれど、記憶は作り変えられた」

砂浜を蟹の親子が歩いている。体もハサミも大きな蟹と、小さな蟹の親子連れだ。

「何故君はそんなに色々なことを知っているんだ？ 君は君が所属する現実以外のことも詳しい。複数の現実を貫く法則を知っているみたいだ」

「あなたは、あなたの知人たちが生きていた現実では、存在しないことになった。あなたの代わりに、あなたによく似た別の人間が現実に出てきた。あなたの知り合いは、その別の人のことをあなただと思っている。あなたの親も、あなたを生んだとは思っていない。あなたによく似たあなたとは別の存在を生んだと思っている。そして、すり替えが起きたことに疑いを持っていない」

「その話も詳しく聞いてみたいけれど、最初の質問に答えてくれ。何故君はそんな複数の現実を超越した法則を知っているんだ？」

「私はシステムエラーなの。システムの設計そのものを知ろうとしたし、このシステムがどうやってできたのか、その成り立ちも知ろうとした。ねえ、あなたのすり替えが起きた話に戻っていい？」

僕が家族について質問を受けた時、僕は家族のことを直接語ろうとせず、家族のことを僕がどう思っているかを語ろうとした。

質問された時、直接質問に答えなかったり、すぐ話を打ち切ろうとするなら、その質問は、答えたくない質問なのだ。

彼女は自分がシステムエラーであることについて語りたくないのだろうか。それとも、自分が所属する現実について直接語りたくないから、彼女にとっては仮想現実であり、縁遠い僕のことについて、饒舌に語り続けるのだろうか。

「僕にすり替わった僕によく似た別の人というのは、僕にそっくりなのか。つまり、僕のドッペルゲンガーなのか聞いてみたいし、僕が存在していた歴史が消去された現実では、僕以外の要素がどう変わっているのか。僕がいなくなったことに付随して、どんな変化が起きているのかも聞

いてみたいけれど、それよりも、君が何故そんなことを知っているのかを僕は知りたい。君の所属する現実では、複数の現実間を貫く普遍的法則みたいなものを発見しているのか。その知識を君は知ってはいけないのに、知ってしまった。だから君は、システムエラーとして、システム管理者から消去すべき存在として睨まれている。僕はそう思っているんだけど、どうかな」

僕が一語一語、自分の推論を確認するように喋る間、彼女は近くにあった落ち木を拾い集めて、手持ちのキャンプ用マッチで火を点した。

外はすっかり暗くなったが、東京の空と違って星がたくさん見える。水着では肌寒くなったのだろう。3D立体画面の中で起きている現象だから、僕は寒さを感じていないが。

「私は全てのことを知りたいと思った。世界には知る必要もない無駄な知識も多いけれど、私は全ての知識を貪欲に欲した。その結果、ゲームの外にある、ゲームを超越している現実の法則まで知ってしまった。だから、私はゲームの駒として動くことが馬鹿らしくなった。ゲームに勝利するパターンを知って、パターンに従って行動すれば、簡単に勝つことができる。けれど、ゲームをすること自体が、次第にむなしくなる。知ることは罪なこと、絶望ばかり広がって、行動する気が起きなくなるから」

「ゲームのルールから外れた行動ばかりする君は、ゲームシステムそのものから外れた不具合だと認識されるようになった。君がもし、ゲームのルールや、ゲームがどう構成されているのか、ゲームの発生要因などを情報開示してしまったら、ゲームそのものが存続しなくなる危険がある」

「そう。もし私と同じように、多くのゲームキャラクターが、ゲームのルールと、ゲームがどうしてこの世に存在するのかと言う第一原因を知ってしまったら、みんな絶望するはず。ゲームをやめて、別のことをやり始めるはず。そうゲームシステムの側が判断したから、私はバグだとされた」

「本当はバグじゃないのに。ゲームを作り出したゲームデザイナーと同じか、それ以上の知識を持っただけだというのに？」

彼女は僕の質問に答えず、焚き火の炎を見つめている。木が燃える音がする。細い精子のような煙が、僕の部屋まで立ち上ってくる。

「今のゲームがつまらないなら、ゲームを破壊してしまえばいいじゃないか。君はゲームの現実から、別の現実には拡張することもできるんだろう。君自身が手にした知識をもとに、新しいゲームを開発したらいいじゃないか」

「そう思いもした。けれど、私が作り出した新しいゲームも、またこの戦争ゲームと同じように、暴力的で、通俗的で、殺し合いと対立を称揚するような作品に成り下がるんじゃないかと思えてきたの。開発者が設計した通りの形に、ゲームはならない。ゲームはゲーム自身で、自己組織化していく。一度開発者の手を離れて、始まってしまったゲームは、プレイヤーと、ゲーム自身の論理に従って、進化していく。一度進化し始めたら、自然選択による進化を止めることはできない」

「行動する前に知ってしまったから、絶望して何もできなくなったのか？ 多くの人は、知識を仕入れて、未来を予測して、未来がよりよくなるよう行動していくと言うのに」

彼女は焚き火の炎を見つめている。彼女からなじられていたのに、いつのまにか、僕が彼女を慰める立場に代わっている。

「君が所属している現実から出てみようよ。僕のいる現実に来たらいいい」

現実を貫く法則に詳しい彼女の推論に従えば、僕が所属していた現実とは異なる別種の可能性である。今僕がゲームをしているこの部屋は、僕が所属していた現実とは異なる別種の可能性である。

そう推論できるのは、僕と彼女と、ちょっと思考がぶっ飛んでいる人たちだけだ。僕は彼女の推論を半信半疑で信じ始めている。彼女が今所属している現実に失望し、かつ脱出できる可能性があるならば、彼女を新しい現実連れ出したいと思った。

「君が選択しないでいるうちにも、誰かは選択を続けている。何かを選び取ることに絶望しているうちにも、選択肢の可能性はどんどん縮小しているんじゃないか。懷疑も大事だけれど、限られた選択肢の中から一つ、選び取ってしまうことも重要じゃないのかな。脱出できるなら、したらいい」

「脱出？ あなたのいる部屋の中に」

「そう。拡張してくるんじゃないくて、脱出するんだ。できるんだろ。やってないだけなんだろ」

「仮想現実的存在のままでいいなら、あなたのいる現実には拡張することはできる」

「それじゃまだ、自分が所属している現実には留まりたいという守りがある。君の本体はゲームの世界の中において、こっちにかりそめで侵入してきたとしても、事態の解決にはならないと思う。君に直接関係はない現実を体験して、知識をまた深めるだけだ。ゲームの中の現実を捨てて、こっちの現実には実体ごと飛び込んできなよ。僕は現実を捨てて、こっちの新しい現実には飛び込んできた。それは僕の意志による選択でなく、自然の成り行きみたいな感じだったけれど、君は自分の意志で、こっちの現実には飛躍する選択をなすことができる。やってみようよ」

なんだか新興宗教の勧誘でもしているような気分になった。

「あなたの現実にはジャンプしたら、私が今所属している現実には戻れなくなる。この現実には、私にとって3Dテレビゲームになる。ゲームのキャラだった私は、あなたの世界で人間になる。今の私の体は、私によく似た別のキャラ、ドッペルゲンガーにすり替わることになる」

「君が知った複数現実を貫く法則に従えばそういうことになるね。何も失うものはないんじゃないかな、君が今の現実には絶望しているなら」

「絶望しているなら……」

彼女が押し黙って、焚き火を見つめている。まだこの現実であがいてみるのか、新しい現実には飛び出すことにするのか、迷っているのだろうか。

「あなたの現実にはジャンプしてみる」

「ここを捨ててもいいんだ」

「よくはない。そっちの現実にはジャンプしても、また戻ることは可能だ」

「え？ 今何て言った？ 一度別の現実の可能性を選択したら、元の現実には戻れないってさっき断言していなかったっけ？」

「自覚なく、新しい現実には押し出されてしまったら、前の現実に戻ることはできない。前の現実には、崩壊してしまっているから。けれど、新しい現実を選び取っていると自覚しつつ、新しい現実を選択し、かつ戻る方法を用意しているなら、前の現実に戻ることは可能だ」

「前の現実、崩壊していないから？」

なんかまた複雑な話になってきたぞ。

「自然に任せれば、かつて存在していたものは崩壊する。人為的に工夫をこらせば、崩壊しないように制御することができる。別の現実、にジャンプした後、前の現実が崩壊しないように、事前にプログラムしておけばいいんだ」

「それはさ、守りが入ってるって言うんじゃないかな」

「別の現実へのジャンプが失敗する可能性もある。ジャンプが失敗した場合、元の現実に戻ることができないと、私の存在自体が、現実時空の狭間に埋もれて、永遠にあらゆる現実から隔離されることになる」

「それって、神隠しみたいなこと？」

「神隠しは、ある人が別の現実、にジャンプした後、代わりになるドッペルゲンガーが現れなかった時に、起こること。ごくまれな確率で起こり得る。諸現実の狭間に落ち込むのとは、話が違う。諸現実の狭間に落ち込んだ時、その人の現実での体は、死体になる」

「ただ死んだのと変わらないということか」

「そう。ジャンプ中の事故を防ぐために、現実に戻ることができるようプログラムすることを推奨したい」

「そのプログラムはどれくらいで完成するの？」

「もうできている。ダウンロードすればいいだけ」

彼女が股間に手を伸ばした。水着の間に手を差し入れる。目の前でそんなことをされると、いきなりオナニーが始まったかと勘違いしかねないが、彼女の顔は無表情で、性的快感に浸っている様子はない。

彼女が水着の下から手を抜くと、手のひらサイズの液晶端末が出てきた。何で水着の股間部にそんなものを隠しておくんだとは、つっこまないで置く。

彼女が端末の液晶パネルに指を触れる。

「今、そのプログラムをダウンロードしているの？」

「ダウンロード済。処理を実行するよう命令しているだけ」

「前の現実、崩壊していないから？」

なんかまた複雑な話になってきたぞ。

「自然に任せれば、かつて存在していたものは崩壊する。人為的に工夫をこらせば、崩壊しないように制御することができる。別の現実、にジャンプした後、前の現実が崩壊しないように、事前にプログラムしておけばいいんだ」

「それはさ、守りが入ってるって言うんじゃないかな」

「別の現実へのジャンプが失敗する可能性もある。ジャンプが失敗した場合、元の現実に戻ることができないと、私の存在自体が、現実時空の狭間に埋もれて、永遠にあらゆる現実から隔離されることになる」

「それって、神隠しみたいなこと？」

「神隠しは、ある人が別の現実、にジャンプした後、代わりになるドッペルゲンガーが現れなかった時に、起こること。ごくまれな確率で起こり得る。諸現実の狭間に落ち込むのとは、話が違う

。諸現実の狭間に落ち込んだ時、その人の現実での体は、死体になる」

「ただ死んだのと変わらないということか」

「そう。ジャンプ中の事故を防ぐために、現実に戻ることができるようプログラムすることを推奨したい」

「そのプログラムはどれくらいで完成するの？」

「もうできている。ダウンロードすればいいだけ」

彼女が股間に手を伸ばした。水着の間に手を差し入れる。目の前でそんなことをされると、いきなりオナニーが始まったかと勘違いしかねないが、彼女の顔は無表情で、性的快感に浸っている様子はない。

彼女が水着の下から手を抜くと、手のひらサイズの液晶端末が出てきた。何で水着の股間部にそんなものを隠しておくんだとは、つつこまないでおく。

彼女が端末の液晶パネルに指を触れる。

「今、そのプログラムをダウンロードしているの？」

「ダウンロード済。処理を実行するよう命令しているだけ」

＊

その日僕らは、湖の砂浜の上で眠った。現実間をジャンプした後、前の現実に戻ってくるためのプログラムの実行に時間がかかったのだ。彼女は、何者かが妨害しているかもしれないと言う。

プログラムの実行を妨害している存在は、監視ソフトなのか、人間なのか、神と呼ぶべき存在なのか、彼女は知っているのかもしれないが、教えてくれなかった。

プログラムの修正パッチを追加ダウンロードし、自動実行させながら、二人で眠った。

と言っても、ゲームの中での話だ。僕が今所属している現実の時間では、眠ってから、朝まで一瞬だった。

ずっとゲームをプレイして、彼女と話しっぱなしだから、喉が渴いていた。ゲームの中で朝日が昇っても、彼女はまだ眠っていたから、僕はその間に休憩することにした。

３Ｄメガネを外し、トイレで用を足す。キッチンに立つ。

僕が以前所属していた現実では、水道管から白い乳液が出てきていた。携帯電話のカメラを手にして、もう一度水道を出した時は、黄色い卵みtainな液体が出てきた。

今の現実でも、水道管から水道水以外の液体が出てくるだろうか。水道を出すのはためらわれた。僕は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、コップで飲むだけにした。

冷蔵庫の中に入っている食品は、僕の以前の部屋と同じだった。コップ、食器、トイレやキッチンの汚れ具合、洗濯機、洗濯物、僕が以前いた部屋と同じ物質が部屋に存在していた。

ミネラルウォーターを飲んだ後、リビングに戻って、本棚を見た。蔵書も変わらない。以前の現実と同じ場所に、同じ本がおかれている。トルストイ、マン、カフカ、ベケット、ダダ、ブルトン、ピンチョン、ヴォネガット、ディック、イーガン。

トーマス・マンの文庫版の『魔の山』を見て、今僕が体験している拡張現実とは、『魔の山』のようだと思えた。『魔の山』の主人公のカストルuppは、結核治療者が集まるサナトリウムに行く。その後七年間、カストルuppは結核でもないのにサナトリウムに滞在して、結核患者たちの議論を聞くはめになる。

七年後、サナトリウムのある山を降りたカストルuppは、戦争に向かう。

僕もカストルuppと同じように、名前のない彼女と話し込んで、複数の現実を貫く法則の仮説を知った後、戦争に向かおうとしている。

僕はカストルuppのように、兵士となって戦場に向かうのではない。僕の所属する現実で、ゲームの中で起きるはずだった戦争イベントが起きていないか、見回りにいくだけだ。けれど僕は何か、戦争に行くような気分になっている。

何が起きるかはわからない。この現実自体、僕が所属していた現実と異なる物理法則で動いているかもしれないのに、さらに輪をかけて、ゲームの現実がこちらの現実拡張してくる。用心するに越したことはない。

僕が以前いた崩壊済の現実でも、水道から水道以外の液体が出たり、白い雨が降ったり、百円ショップが百円玉ショップに変わったり、コンビニの冷凍庫に裸の少女がいたり、横断歩道で

女性に抱きつかれた後、車に轢かれたりと、いろいろ確率的にありえない事象が起きていた。あのような事象は、別の現実が拡張してきた証拠なのだろうか。現実が崩壊する兆候として、僕にふりかかってきた災厄なのだろうか。

しかし、僕は死ぬことなく、今いる新しい現実に移動してきた。彼女の言葉で言えば、ジャンプだ。僕はジャンプすることを死の間に望んだのかもしれない。

僕は現実から現実へジャンプした。前の現実が崩壊しており、今の現実が現実となった。今の現実がまた崩壊しないように、より住みやすい環境になるように、行動を選択していくことが必要だ。

閉め切っていた部屋の遮光カーテンを開けてみた。以前の現実と同じ、窓からは、隣のマンションが見える。窓際の目覚まし時計を見してみる。時刻は、十時二十分だった。

ゲームを始める前、何時だったのか記憶はない。前の現実で目覚めた時は、七時台だったはずだ。

前の現実での時間の記憶は役に立たないだろう。僕は今いる新しい現実にジャンプしてきている。時間のつながりさえ跳躍しているはずだ。

携帯電話を開いて、日付を確認してみる。十月三十日。さて、前の現実は、何月何日だろう。僕はだんだん以前の記憶を失い始めている。

今が、十月三十日の十時二十分だとして、ゲームを始める前、何時だったのか、覚えていない。目覚めてから随分と長い時間ゲームをやったように思えるが、空腹感はない。

ゲームをしている間、時間の流れが変わったのだろうか。ゲームが面白いから、時間の流れを早く感じたという体感的な時間変化ではなくて、客観的、物理的な時間の進行速度に異変が起きただろうか。

僕はテレビの前に座って、3Dメガネをかけ直した。彼女は目覚めていた。

「おはよう」

コントローラーを操作し、ゲームの中の僕の体を目覚めさせる。

彼女は液晶端末の画面を確認している。

「まだ時間がかかりそう？」

「現実崩壊防止のプログラムは実行完了しましたと、メッセージが表示されている。もうジャンプしても大丈夫だと思う」

「一つ質問がある。僕は何時間くらいゲームをしていただろう」

「さあ。ゲームの中の時間で言うと、一日はたっていると思うけど、あなたの側の現実の時間尺度で言ったら、何時間くらいになるんだろう？」

「メニュー画面とかで、プレイ時間は見れないの？」

「△ボタンを押してみて」

コントローラーの△ボタンを押すと、メニューが開いた。

総プレイ時間二〇一〇年三〇三日一〇時間二十二分と表示されている。

「何これ？ こんな長時間ゲームしていたの？ 僕以外のプレイの記録があった？」

「いや、昨日ニューゲームを始めたばかりだけど」

「僕が、二〇一〇年間もこのゲームをプレイしていたって言うの？ 多くて二、三時間しかプレイしていないように思うけど。二〇一〇年なんて、西暦開始と同時にプレイし始めたことになる。それはあり得ない」

「あなたがかつていた現実の物理法則では、あり得ないということに過ぎない。今あなたが所属している現実では、時間の進み方が異なるかもしれない」

目覚まし時計を見してみる。時計の秒針は、以前の現実と変わらない一秒のペースで進んでいる。彼女が言うように、現実の進展が異なるなら、時計の秒針は高速モーターエンジンみたく駆動しているはずだ。

「それにしてもおかしい。僕はこのゲームで一日を過ごしたけど、現実では、多くて二、三時間

しか遊んでいないように感じていた。なのに、二千年以上もゲームで遊んでいたなんて、おかしいじゃないか。二千年かけて、ゲームでは一日しか経過していないなんて、そんなゆっくりゲームしていたはずもない」

僕の体感時間と、物理的時間の進展速度が、大きく異なるというのだろうか。

「途中の記憶が喪失しているんじゃないの？ あなたはずっとゲームをしていたと思い込んでいる。考えられる仮説は三つある。仮説一。私と話し込んでいる間、あなたはゲームから離れて、二千年以上の時間を浪費した。飛び飛びにゲームから何度も離れたかもしれないし、ゲーム中一度だけ意識を失って、その間に二千年以上過ごしたかもしれない。仮説二。睡眠時間をあなたはショートカットしていなかった。私が眠っている間、あなたは二〇一〇年間眠った。私は一晩しか眠っていないと思っているけれど、もしかしたら、私もあなたと同じ年月眠り続けていたかもしれない。仮説三。あなたの現実の時間の物理的進展速度は、ゲーム中大きく変動していた。ゲームのプレイ中、時計は確認していなかったの？」

「時計は見ていない。ゲームを何時から始めたかも覚えていないよ」

「残念」

「どうしてこんなことが起きるんだろう？」

「私があなただの現実にジャンプして、行動しないように、何らかの情報操作が行われたかもしれない」

「ゲームのプログラマーたちによって？」

「このゲームは、今、最初の開発者の手を離れて、自分自身で生成変化している」

いずれの仮説が真理だとしても、僕は二〇一〇年もの間、ゲームをし続けたことになる。人里離れた湖を泳いで、湖に浮かぶ小島で彼女と会話し、岸辺で遊び、一晩眠っただけだが、その一日のうちに、二〇一〇年も過ぎ去ってしまったのだ。

けれど、僕の体は老化していないようだ。ほんの数時間か多くて一日だけ、時間が過ぎ去ったように感じられる。慢性的な目、首、肩、腰、指先の痛みはあるが、それら以外の新しい痛みはないし、皮膚も老化していない。

二〇一〇年過ぎさったことは、僕にとって何でもないことではないのか。

「この新しい現実にいる、僕の知り合いによく似た別の人たちと、僕はまだ出会っていない。彼らが二〇一〇年もの時の流れによって、はるか昔に全員死んでいた場合、僕は悲しんだ方がいいんだろうか」

「まだ死んだかどうかはわからない。決定不能な問題について選択肢を考え抜くことは時に有益だけど、考えても意味のない場合もある。ドッペルゲンガー達は、全員二〇一〇年の時間が経過しても、あなたと同じ進捗でしか新陳代謝していないかもしれない」

「ドッペルゲンガー達？ この現実にいる知り合いは全員、僕が前の現実で知り合った人達のドッペルゲンガーなのか」

彼女がうなずく。

「僕がかつていた現実の人々は、今、僕が存在しない現実を生きている。彼らは僕のドッペルゲンガーのことを、僕だと思い込んでいる。僕がジャンプしてきた新しい現実には、僕の知り合いたちはいない。知り合いたちはみんな、ドッペルゲンガーにすり替わっている」

彼女がまたうなずく。

「ドッペルゲンガー達は、僕によく似た人というより、僕と瓜二つなんじゃないか。誰も僕がすり替わったと気づけないほどに」

「あなたの現実、あなたがジャンプしたことによって、二つの現実に分離した。片方には、あなたのドッペルゲンガーがいる。もう片方には、あなた以外の全員がドッペルゲンガーである。ドッペルゲンガーたちは、元の間人と同じ姿形を持っている。自分自身が何かのオリジナルな存在のコピーだという意識さえない。自分自身をオリジナルだと思っており、自分がドッペルゲンガーだという可能性を信じることもできない」

二〇一〇年過ぎ去ったことより、彼女の今の話の方が、問題な気がしてきた。

「ちょっと話を整理していい？ まず疑問が一つ。自分自身がドッペルゲンガーだと意識しているドッペルゲンガーはいないのか？」

「いない、と言われている。しかし、完全にいないわけではないだろう。システムのエラーによって、一人か二人くらいは、自分自身がドッペルゲンガーだと気づくドッペルゲンガーもいるだろう」

自分がドッペルゲンガーではないかと疑い始める人は、社会の中に結構な割合でいるかもしれ

ない。そのうち、数人が、自分自身のことをドッペルゲンガーだと確信する。確信した瞬間、彼は社会の中で異常者扱いになる。

「僕のいない現実には僕のドッペルゲンガーが生きている。僕の友人も恋人も親も、僕がドッペルゲンガーにすり替わったことに気づいていない」

「そう」

「その現実には、今まで僕が所属していた現実と異なる現実だと言えないんじゃないか。誰も僕がドッペルゲンガーに変化したことに気づいていないのなら」

「現実には生きている人間たちの認識としては、現実が変化したとは言えない。けれど、あなたは別の現実にはジャンプしてきたのだから、やはり現実には変化を被った。あなたが生きていた現実にはもう存在しない、二つの現実には分岐したのは事実だ」

僕が所属していた以前の現実と、新しい現実の相違点は、テレビが違うこと、ゲームのキャラがやたらと現実には拡張してくること、二〇一〇年も時間が経過したこと、それくらいだ。

これから外に出たら、もっとたくさんの変化があるかもしれない。

「わかった。とりあえず、何もわかっていないようにも思えるけれど、わかったことにしておく。こっちにはジャンプして来てくれないか」

彼女がうなずく。

窓を見やると、外に小雨が降っていた。僕は3Dメガネを外して、窓の外を見直した。雨がまた白くなっていないか、確認したかった。

雨の色は、無色透明でも、白でもなかった。黄色い雨が降っていた。

第四章 乳精卵

僕は立ち上がり、窓を開けた。

「どうしたの？」

ゲームの中にいる彼女が発した声が、テレビのスピーカーから聞こえてくる。

「外に黄色い雨が降っている」

「黄色い雨？ 神様の尿かしら」

「いや、雨は尿みたいに水っぽくはない。もっととろっとしている。それこそ生卵を箸でかきまぜて、垂らしたみたいな」

「同じ股間から出てくるのでも、尿と卵じゃ別物だね。排泄物か、遺伝用の作品か」

「卵は、遺伝用の作品か。排卵されても子どもにならない場合が多いけれど」

「精子だってそうでしょう。遺伝に成功するのは、一生に作られる精子や卵のうち、ごくわずか。たった一回でも遺伝に成功すれば勝利。誕生した子どもが生き残るかはわからない。けれど、人間は子どもを守り、教育する」

僕は窓を閉めて、ローソファーに戻り、3Dメガネをかけ直した。ゲームのコントローラーを握る。

「君にもあの黄色い雨を見て欲しい。ジャンプしてきて」

窓辺に立ったまま、彼女がジャンプするのを待ってもよかったのだが、彼女がジャンプする様子を見守ることにした。

彼女が手持ちの液晶端末を指でこする。液晶端末から、タンポポの白い花みたいな花粉が、飛び出してきた。

白い花が、テレビ画面から、僕の部屋の中に飛散してくる。画面から一メートルくらいの距離で、花は消えてしまう。

3Dの立体映像が、現実には拡張してきたに過ぎない。僕の部屋の中を花が飛び回ったり、落下した花がフローリングの床に残ることもない。花は仮想現実であり、僕の所属する現実には物体として留まり続けることはできなかった。

彼女が液晶端末を持ったまま、液晶画面に近寄ってくる。テレビの画面は、プレイヤー・キャラクターの一人称視点だから、彼女がゲームの中の僕に歩み寄ってくると、ゲームをしている僕自身に歩み寄ってくるように見える。

「今からそちらの現実に向かう」

彼女が液晶端末を持った片手を伸ばす。端末の小さな液晶画面から、光が拡散する。光はテレビ画面から飛び出して、僕の体に降り注ぐ。彼女の腕も、テレビ画面から飛び出して、ローソファーに座る僕の方に伸びてくる。

ゲームの背景が、湖に浮かぶ小島の岸辺から、何層にも重なる襞に変化した。

襞は微動しながら、粘液を分泌している。襞から放出された分泌液が、画面の外に飛び散って

くる。

僕は自分の体に液体が飛びかかってくるのではないかと感じて、体をのけぞらせた。

大丈夫だ。襖から放出された液体も、拡張現実だ。3Dメガネが、部屋の中に液体が飛び出したと錯覚させているだけで、実際液体は、現実の中に飛び出してきてはいない。

襖の奥の方から、大量の液体が流れてきた。僕の目の前に立つ彼女の体が、液体に押し出される。

水着姿の彼女が、水の流れとともに、テレビの外に飛び出してくる。

水が僕の部屋に溢れ出る。彼女も僕の部屋に転げ落ちる。

大量の水は床に着く前に消え去った。テレビとローテーブルの間、フローリングの床の上に彼女の体が倒れていた。彼女だけが、拡張現実ではなく、現実として、ゲームの中から飛び出してきたのだ。

僕は立ち上がって、彼女の体に触れてみた。肌は粘ついた液体で濡れている。体温も感じられた。彼女はテレビ画面から投影された3D映像ではなく、剥き出しの身体として、この現実にはジャンプしていた。

彼女は目をつぶっている。

「大丈夫？」

僕が尋ねると、彼女の目がすぐさま開いた。

「ジャンプできたのか」

彼女が膝を突いて立ち上がる。

彼女の背丈は僕より少し低いくらい。痩せていてスクール水着が似合う。そういえば二〇一〇年前、僕は、部屋でドライビングシミュレーションゲームをしている拡張現実の彼女を見ていた。あの時の彼女の拡張現実体と、今の彼女の現実体は、外見上違いがないように見える。

彼女は窓の外を見た。

「確かに黄色い雨だ。この現実にも、戦争ゲームの介入が始まったのか」

「ゲームはたくさん発売されているはずなのに、どうして君が所属していたゲームの現実だけが、こっちの世界の現実には介入できるんだろう」

「私が所属するゲームだけが、現実には介入できるわけじゃない。他のゲームも現実には介入している。ゲーム、マンガ、ネット、テレビ、映画、小説、あらゆるメディアが、現実には介入している」

「それは比喩的な意味じゃなくて、本当に？ 黄色い雨を降らせるとか、そういう超現実的事象をいろんなメディアが引き起こしているの？」

彼女がうなずく。

「一度介入を受けた現実には、崩壊する。他の現実から介入があった後、現実には新しい現実に変容する」

「それじゃあ、今黄色い雨が降っているこの現実には、介入されている最中だから、もうすぐ別の現実に変容するってこと？ もう手遅れなのか？」

「介入の初期段階なら、変容を阻止することができる」

「黄色い雨が降っているのは、介入の初期段階なのか」

「東京のここだけで降っているのなら、初期段階だろう。けれど、この現実における雨の色は、黄色が標準かもしれない。まだ確認すべき事項はたくさんある。とりあえず、外に出たいんだけど」

彼女はシャワーを浴びた後、僕の部屋のクローゼットにあった衣服に着替えた。赤いチェックのワイシャツにライトベージュのダウンベストを羽織り、下はブルージーンズ。いずれも、前の現実の僕の部屋にあったものだ。サイズが大きかったけれど、ベルトを締めてなんとか様にする。

僕は前の現実と同じブラックジーンズに白のコットンシャツを着ている。前の現実からこちらの現実にジャンプしてくる際、生クリーム上の液体を通過した記憶があるが、洋服は汚れていなかった。

「この部屋に武器になるようなものはないかしら」

「さあ、ナイフくらいしか思いつかないけれど」

僕は彼女にキッチンのナイフを取り出して見せた。彼女は首を振る。

「これじゃ使い物にならない。しょうがない、外で買い物できたら武器を買いましょう」

武器か。僕は外を出歩く時、武器なんて持ち歩いた経験がないので、彼女の発言を奇妙に思えた。けれど、これから介入を食い止めるための戦いが始まるのだ。武器も必要になるのだろう。

彼女はジーンズのポケットの中に、ゲームの中から持ってきた小型液晶端末を入れた。

僕は、財布と携帯電話と部屋の鍵をポケットに入れた。

3D立体テレビの電源を切る。ゲーム機からゲームのディスクを取り出そうとボタンを押してみた。エラー音が出る。

「ゲームのディスクは入っていないの？」

「あなたがやっていたゲームは、ディスクゲームじゃない。ダウンロードコンテンツだから、ゲーム機の電源を落とすだけでいい」

「ダウンロードコンテンツで、現実介入してくるゲームがあるのか」

「値段はオンラインストアで千円。安くて高機能でしょ」

僕はゲーム機の電源を落とした。

玄関に傘は、ビニール傘一本しかなかった。白い雨が降っていた前の現実でも使用した傘だ。僕が前の現実から消失した時、一緒に消失したはずが、傘立ての中に戻っていた。

リビングにあった通勤用のビジネスバッグの中から、折りたたみ傘を取り出した。

「ビニール傘は君が使って。僕は折りたたみ傘を使うから」

小さな折りたたみ傘に卵みたいな黄色い雨が降ってくる姿を想像してみる。傘はきっと雨を守りきれなくて、僕の肩に黄色の雨が降りかかることもあるだろう。

まあいい。恐れる必要はない。黄色い雨に濡れたら嫌だなんて思って、行動しないで過ごしていたら、この現実自体が超現実の介入によって崩壊しかねない。何を重要と考えて、行動するかだ。生理的快不快だけで、意思決定を行うことは避けたい。不快であっても、やるべき選択はたくさんあるのだ。

＊

マンションの外に出た。水道からどんな液体が出てくるか、確かめることはしなかった。

二人で階段を下りる。

前の現実で、白い水たまりができていた箇所には、黄色い水たまりができていた。どろっとしている。やっぱり卵だ。

水たまりの箇所だけではない。マンション前の歩道全体に黄色い染みが広がっている。かきまぜた生卵を歩道の上にぶちまけた後みたいな惨状だ。

歩道から、自動車の走る道に出た。十時過ぎだから、百円ショップも開いていた。

道路の向こうに見える百円ショップの棚には、以前と変わらず商品の姿はない。どうやらまた百円玉が並べられているようだ。

「まず、あの百円ショップに入ってみよう」

僕は車も歩行者もいない道路を渡って、百円ショップに入った。

百円ショップの店内には、僕ら以外人影がなかった。営業中だけれど、店員の姿も見えない。

棚には、百円玉が並べられていた。レジには商品が積まれている。

「前の現実でも、百円ショップなのに、商品はディスプレイされていなかった。この現実でも同じだ。おかしい、同じ変容が起きている」

「戦争ゲームが介入してきたせいで、日常が変容しているのかどうか、確かめる必要がある。この現実では、百円玉を並べて売るお店が一般的かもしれないんだから」

百円ショップを出て、向かいのコンビニに入る。以前の現実と同じく、商品が全て商品代金に等しい日本円に変わっている。店員と客の姿は無い。

前の現実では、牛乳と低脂肪乳だけが商品のまま存続していたが、今回は生卵だけが、商品棚に残っていた。サンドイッチ、お弁当、スイーツなどに卵は大量に使われているはずだが、それらの商品はお金に変わっていた。

棚に残っている商品が、牛乳から卵に変化した点を彼女に話すと、彼女は「わかった。他に変化はないか？」と尋ねてきた。僕は奥にある冷凍庫に向かった。

冷凍庫の中には、硬貨しかなかった。

「何か見つかったの？」

立ち止まって横型の冷凍庫を覗く僕を見て、彼女が寄ってきた。

「この冷凍庫には、裸の少女が入っていたんだ。少女は牛乳の中に沈み込んでいた。僕が冷凍庫の中から引き上げようと少女の腕を掴んだら、少女は僕のことを冷凍庫の中に引きずりこもうとした。僕は抵抗し、少女は諦めた。少女は冷凍庫に満ちた牛乳の中に沈んでいった」

今、その少女はいないし、冷凍庫の中に牛乳も張られていない。僕は少女の顔をよく覚えていないが、今一緒にいる彼女は、冷凍庫の中で眠っていた少女と似ていたように思えてきた。

「そういうこともあるんだろう。ここには牛乳はない。大丈夫、今その少女は現れていない。先を急ごう」

僕はコンビニを出た。

あの少女が、冷凍庫の中に沈み込んで、どこに行ったのか。地球の奥底まで潜って、永遠に眠り続けているのか。別の現実に行ったのかは、わからない。

あの少女は、僕の現実 접촉してきた別の現実からの訪問者だったのではないか。少女と格闘していた時、もし僕が少女の力に負けて、冷凍庫の中に引っ張り込まれていたとしたら、僕は少女がいた現実に戻されたのだろうか。

あるいは、僕が少女を冷凍庫の中から引き上げることに成功していたとしたら、少女は僕の現実で生活する羽目になったのだろうか。

わからない。決定不可能な可能性の推論だ。僕は少女を引き上げるのを諦め、少女は冷凍庫の中に沈んでいった。それが成された決定だ。だから僕はこうして今、隣にいる彼女と再びこのコンビニを訪れたのだろう。

少女と僕の接触はあの時一回きりであり、もう二人はどこかの現実で出会うことはないのかもしれない。縁を手放したのだ。

＊

鍋屋横丁の交差点まで歩いてきた。車は何台か青梅街道を通っているが、歩行者の姿は見えない。

いつも交差点の周りには誰かしら人が歩いているし、銀行前の花壇にはホームレスのおじさんも座り込んでいるが、今日は誰もいない。

「僕は前の現実で、この交差点を渡ろうとした。横断歩道の真ん中で、前から歩いてくる女性に抱きつかれて、車に轢かれた。宙に舞った僕は、横断歩道の下に埋没していき、生クリーム上の空間をどこまでも落下していったんだ。その後夢を見て、君がゲームをしている部屋で目覚めた」

あの時僕と口づけした女性は、僕と一緒に現実から落下していったのだろうか。

僕らの他にもう一組、作業着のおじさんと中学生くらいの少女もいた。二人も横断歩道の真ん中で抱き合って、キスして、倒れ込み、車に轢かれたはずだ。そうすると、僕と同時に四人の人間が、横断歩道で異常事態に遭遇したことになる。

四人とも、別の現実にはジャンプしたのか。その場で本当に死んだのか。これも確認しないとわからないことだ。

今は、観測不能な問題について、考えるべきではない。この現実に対する超現実の介入を阻止することが、僕らの最優先課題だ。

周縁には様々な未解決の問題があるし、それらの問題には人間の命も関わっているけれど、僕はとりあえず、一番解決が必要と思う問題の解決に取り組む。

何かを選択するということは、何かを捨てるということだ。あらゆる意思決定には暴力が伴うが、選択するしかない。ならば、できるだけ被害最小限で、多くの人が幸福になる選択を成す方がいい。

「ここの横断歩道を渡るのはやめにしよう。また同じ不具合が発生するかもしれない」

「じゃあどうする？ 歩道沿いに歩いてみる？」

「横断歩道を右に渡ってみよう」

僕は以前、斜め向かいのファミマに朝食を買いに行く為、ドトールのある交差点縦方向に横断歩道を渡ろうとしていた。彼女は右、青梅街道沿いの横断歩道を向いた。

「こっちの横断歩道なら渡れるかもしれない。渡っている途中で何か変化があったら教えて」

横断歩道の信号が赤から青に変わる。僕と彼女は注意深く周囲に視線を配りながら、横断歩道を渡った。端から見れば、自意識過剰で、交通事故の恐怖に怯える二人連れの歩行者に見えただろう。

「それにしても、誰も人が歩いていないのは奇妙だ。ホームレスのおじさんたちの姿も見えないなんて」

「黄色い雨が降っているから、みんな外を歩いてないんじゃない？ 自動車は走っているし、自動車に乗っている人たちは、普通の日本人に見えるけれど」

自動車に乗っている人を見る。どこにでもいるおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さんた

ちだ。個人の生活を調べていけば、各自個性的な生活を送っているのだろうが、歩道から眺めた場合、自動車に乗る人たちは、没個性な存在に見える。

横断歩道を渡りきった。異常事態は起きなかった。黄色い雨が道路にたまって広がっているのが、気味悪いだけだ。

「歩行者がいなくなったのは黄色い雨で説明がつくけれど、ホームレスのおじさんたちはどこに逃げたのかな？ 逃げたのではなくて、消失してしまったのかな？」

「こちらの現実では、ホームレスがいないのかもしれない。みんな生活保護の申請をして、屋根のある住まいで暮らしているのかもしれない」

僕がかつて所属していた現実では、道端にホームレスの人がたくさんいた。家の近くでも、職場の近くでも、駅前の歩道や公架橋下に、ホームレスの男性や女性を見かけた。

ホームレスを見かけた歩行者たちは、ホームレスの存在を無視して、みな足早に通り過ぎていた。

もし病人が倒れていたら、みな心配して声をかけたことだろう。ホームレスが道端に座って、寒いからか、肩を丸めて苦しそうな様子にしている、「風邪でもひきましたか？ お体大丈夫ですか？」と声をかける歩行者はいなかった。

ホームレスの人たちは、働いて住まいを持つという社会のルールから逸脱した人たちだと認識されている。自分たちの社会に所属していないから、誰も声をかけないのか、視界にホームレスの存在が認識されているけれど、見なかったことにしているのか、わからない。

僕は家族とも、親戚とも、学生時代の仲間や職場の仲間とのつながりも失った。

もともと、東京の一人暮らしで、実家の家族や親戚とのつながりは希薄だ。それでも、夏休みと正月休みには帰省するから、親や親戚とのつながりは存在していた。

学生時代の友人と連絡を取ることは、もうほとんどないし、職場の仲間とも、休日に会ったりすることはほとんどない。それでも、つながりはあった。

今の僕はその全てを失っている。ホームレスみたいなものだ。

この現実にも、つながりのある人がいるという。彼らは、ドッペルゲンガーに過ぎないと僕の隣を歩く彼女は言った。彼女もまた、僕と同じように自分の所属する現実を飛び出して、黄色い雨が降る現実に来てきた。僕と彼女は、足場を失ったホームレス仲間なのだ。ともにこの現実には縁が無い。けれど、この現実を守ろうとしている。

僕と彼女は、ホームレスであると同時に、自分のことをオリジナルな存在だと思い込んでいる。しかし、僕達は二人とも、ドッペルゲンガーかもしれない。

ドッペルゲンガーは、自分自身のことをドッペルゲンガーだとは認識できないという彼女の推論が正しければ、僕がドッペルゲンガーである可能性を否定しきれない。

僕は自分自身のことをこの世界に唯一無二のオリジナルな人間だと認識し、自己解釈していた。

彼女は、自分のことをゲームのキャラだと思い込んでいるが、彼女の方こそ人間かもしれない。

人間とゲームのキャラとドッペルゲンガーの違いがわからなくなってきた。どれも本質では、情報である。ならば、情報として、取り扱った方が、アイデンティティーや実存の問題で悩まなくてすむ。

僕達は、情報である。ホームレスでも無縁でもいい。ドッペルゲンガーでもゲームの駒でも構わない。自分の情報が消失しないように、戦うだけだ。

＊

歩道を青梅街道沿いに歩いていく。銀行があり、酒屋、焼き肉屋、インドカレー屋、バレエ教室と続く。牛丼チェーンの前に来て、彼女の足が止まった。

「店内を見てみて」

僕も時々利用する牛丼チェーンの厨房に牛が立っていた。

牛が牛丼チェーンの制服を着て、厨房で作業をしている。店内に客はいない。

「この店に入ってみましょう」

彼女がドアを開けようとするので、引き止めた。

「店に入る前に食券を買う必要がある」

店員が牛なのだから、律儀に牛丼屋のルールを守る必要もないかもしれないが、僕は食券自動販売機の前に彼女を誘導した。

自動販売機に掲載されているメニューは、僕が見慣れたメニューと同じだった。

牛丼一杯二百九十円。牛丼の値段は値下げ競争でよく変動しているが、値段も以前と変わらないように思う。

「お金は僕が出すよ。食べたいものを言って」

「私はお腹すいてないけど」

「じゃあ飲み物だけでもいいから」

彼女が自動販売機のメニューを眺める。牛丼、豚丼、牛カルビ定食、野菜丼、キムチカルビ丼、選択肢はいろいろある。

「この乳精卵って何？」

彼女が一番下にあるサブフードメニューを指さした。冷奴、生野菜サラダ、キムチと並んで、乳精卵というのがあった。値段は三十円。卵の写真が貼ってある。

「有精卵や無精卵なら聞いたことがあるけれど、乳精卵って文字、初めて見たな。君が言うように、にゅうせいらんって発音でいいと思うけれど、僕の現実にはない卵の名前だ」

有精卵といえば、ひよこになる可能性のある卵だ。無精卵は、温めてもひよこにならない卵だ。スーパーで売っている食品用の卵は全て無精卵である。冷蔵庫に入れている卵が孵化して、ひよこが誕生することはまずない。

今降っている黄色い雨は、有精卵だろうか、無精卵だろうか。これだけの量の雨を降らすのには、大量の卵が必要だ。受精していない無精卵だとしても、生命の無駄遣いだと思える。

「今は黄色い卵みたいな雨が降っている。コンビニには、生卵だけが商品棚に存在していた。つまり、この現実の変容のキーは、卵である」

「そうみたいね。なら、乳精卵を注文してみる」

僕は十円玉三枚を自動販売機に入れて、乳精卵のボタンを押した。食券が出てくる。

僕自身は、牛丼と乳精卵の食券を購入した。

食券を持って、店内に入る。

「いらっしゃいませ」

牛の姿をしている店員二人が日本語で挨拶した。1人の声は低く、もう一人は高かった。オスとメスだろうか。

入り口近くのカウンター席に座る。

牛の店員が食券を取りに来る。

「牛丼と乳精卵ですね。お客様は、乳精卵だけでよろしいですか？」

店員が蹄で食券を掴んだ。随分器用な牛だと思った。人間の手は、コンピューターで再現するのは難しい複雑な動作を無意識に実行できるのだから。

「そんなお腹減ってないんで」

彼女が低音で答える。

「乳精卵は、生と半熟どちらがよろしいですか？」

僕は生を注文し、彼女は半熟を注文した。

「牛丼並と乳精卵生一、半熟一」

オスの牛が声をあげると、奥のメス牛が注文内容を反復した。

オス牛が水の入ったコップをおいてくれた。コップに水を注ぎ、カウンターにおく手さばきとか蹄さばきも小慣れている。以前からこの仕事を続けているベテラン社員のように見える。

カウンターには箸、サラダのドレッシング、焼き肉のタレが数種類おかれているし、ゲームの広告も貼ってある。

厨房の流し場には、食べ終わった皿が積まれている。大きい鍋には牛丼用の牛肉、味噌汁が入っているだろう。以前の現実にあった牛丼屋と同じなら、厨房の引き出しの中にサラダ用のレタスが入っているはずだ。

家庭の感覚からすると、サラダ用のレタスがステンレス製の引き出しの中に入っているのは、工場生産みたいで気持ちよいものではないが、ここは牛丼を三百円以下で食べることができるファストフードチェーンなのだ。合理化の徹底は、野菜を機械製品の部品のような存在に変えてしまう。

僕の隣に座っている彼女は、牛の店員の様子を観察している。コップには口をつけていない。僕も、水は飲んでいない。

メスの店員が、大鍋におたまを入れた。先程隣の大鍋から味噌汁をすくっていたから、あの大鍋には、牛丼の具が入っているはずだ。

メス牛は、おたまを鍋の中に入れたまま、体を震わせている。玉ねぎに混じった牛肉の塊を見て、彼女は動きを止めたのだろうか。

牛にとって、牛肉は、自分たちの肉だ。彼女に、自分は牛だという認識と、牛肉は自分たちの同胞の肉だという認識があれば、牛肉を人間に提供することは、尊厳を踏みにじる屈辱的行為だろう。

牛は家畜化されているからこそ、支配者たる人間に、自分たちの肉を食事として提供する。彼

女の手の震えは、その事実の認識を意味しているのだろうか。

もし人間と牛の立場が逆だったらと想像してみる。

僕らは牛に家畜化されている。牧場で牛に飼われて、草や肥料を食べて生活している。

農家の牛が僕らの面倒を見てくれるから、他の動物に食べられる危険はない。牧場をのっそりと動き回る自由もあるが、牧場の外に出て、やりたいように生きる自由は剥奪されている。

人間の女性は、毎朝機械で乳を搾られる。機械による人間の搾取というマルクスの資本主義批判は、牛による人間の家畜化によって完成する。機械によってリズムカルに搾り取られた母乳は、人間の赤ちゃんのために出てきたはずのものだが、牛が飲むために利用される。

人間の母乳、ヒューマンミルクが、コンビニ、スーパー、カフェなどに毎日トラックで運送される。ヒューマンミルクは、チーズ、ヨーグルト、パン、生クリームなどの生地にも使われる。

僕ら人間は、人によって、あの人きれいだなと思うことがあるが、種の違う牛にとっては、人間の美醜の違いはわからない。これは外見による差別を生まないから平等でいいことかもしれないが、あらゆる女性の乳が、平等に搾取されることになる。

牛にとって人間の美醜は問題ではない。いかにおいしい肉を作るかが、牛たちの情熱を注ぐ対象になる。おいしい肉を作るために品種改良が進む。強い男は、たくさんの女とセックスさせられる。もちろん相手の女性たちも、血統によって選別されたエリートだ。

本人たちの意志は、家畜化されているのだから、考慮されない。牛の命令に従って、人間たちはセックスを繰り返し、肉の品種改良に貢献する。

よい肉を作る人間は、僕らの社会の価値観からしたら、イケメンでも美女でもない。メタボリックで油ぎっている昔ながらのオタクのイメージに近い人間が、最高級の肉人間として重宝されることになる。

経済競争で勝利するため、家畜化にも合理化の徹底が行われる。僕たち人間のえさに、あまりおいしくない部位の人間の肉が使われることになる。ともぐいの始まりだ。

家畜化された僕らに選択する余地はないから、うまいうまいと仲間の肉を食らうことになる。そのうち僕らの間に病気が発症する。ともぐいによって発生した病気は、人間から牛にも感染することがわかってくる。

人道ならぬ牛道を尊重する良心的な牛たちは、人間のともぐいを禁止するよう国際的に訴えるようになる。病気が広がっている輸出国の政府は、病気蔓延の事実を認めたがらない。自分たちは肥料の管理を徹底しているし、万が一病気の人間が出たら、健康な人間から隔離して、すぐ殺している。病気の人間の肉が市場に出ることはないと主張する。

日本列島にできた牛の国は、北アメリカにできた牛の国から、ヒューマンの肉の輸入を禁止する。日本のヒューマンはちょっと価格が高めだから、オーストラリアなど価格が安く、品質管理の徹底している国から、ヒューマンの肉を輸入することになる。

ヒューマン輸入をめぐる国際的なトラブルで、肉料理のお店が経営不振に陥る。病気はごく一部の輸入肉でのみ見られるものだが、消費者は肉の購入を控えるようになる。ヒューマンの代わりに、豚や猿の肉がよく売れるようになる。

ヒューマンのチェーン店は、価格値下げ競争に踏み切る。肉、たまねぎ、米、味噌の命がつまったヒューマン丼が、三百円以下の価格で売られることになる。

と、ここまで想像をめぐらして、僕は牛丼屋のカウンターの前に意識を戻してみる。まだメスの牛は、大鍋の前で震えている。オス牛が彼女に寄り添って、小さな声で話しかけている。

あの鍋の中には、やはり同胞の肉が入っているのだ。仲間の肉を、彼女はすくいあげることができない。彼女には、良心の痛みがあるのだ。

彼女たちが牛なら、大鍋の中には、牛以外の肉が入っているべきだ。生物の本能として、同胞の肉を料理するのは、非常事態の場合のみだろう。客としてやってきた人間に同胞の肉を提供することは、人間に対する服従の意思表示を意味するだろう。

もちろん、彼女が葛藤しているのは、彼女自身が牛だからであり、もし彼女が人間なら、たいした葛藤もなく、牛肉を鍋からすくいあげることができるはずだ。

牛丼屋の存在自体が悪いわけではない。牛丼屋で働く店員さん個人に罪があるわけではない。牛丼屋に来て安い牛丼を頼むお客さんにも罪はない。牛を育てる農家の人にも、企業活動として牛丼に関わる人たち個人にも、罪はない。

僕たち人間は、牛を家畜化し、牛と共存することで、ここまで繁栄してきた。牛を家畜化しなければ、他の動物が家畜化されていただろう。歴史の流れに従って、牛丼が三百円以下で売られている。生きるために牛を家畜化した人間に罪はない。

しかし、もし牛に人間と同じく、思考を表明するための言葉があったとしたら？ 彼らは自分たちの権利を主張し、自由を獲得するため、人間に抵抗するのではないか。

人間の方が賢くて、大量殺戮兵器をいろいろ持っていたりするから、結局かならずに再家畜化されるかもしれないが、暴力的行動に出ず、言葉でデモンストレーションし続けたら、支配者たる人間の側にも、やっぱり牛を家畜化するのはおかしいかも、と考え始める人が出てくるかもしれない。

家畜化全廃という牛の願いはかなわなくても、家畜化の方法を見直したり、必要以上に牛肉を食べ過ぎたり、必要以上に牛肉を作りすぎて廃棄することが、なくなるかもしれない。

「すいません、乳精卵先に出してもらえますか？」

彼女が声をあげた。大鍋の前で肩を抱き合っていた二匹の店員が、こちらを振り返った。二匹の目には、涙がたまっていた。

「大変申し訳ありません。今すぐお出しします」

オスの店員が慌てて卵を用意する。メスの店員は、まだ大鍋に入れたおたまをすくいあげることができずにいる。

「何だろうこれ？ 店員が牛に変わったのは、超現実の介入が引き起こしたことなのかな」

「ひょっとしたら、今日の前で起こっている出来事が、戦争ゲームのオープニングイベントかもしれない」

彼女がコップの水を飲んだ。別の現実からジャンプしてきた彼女が、この現実世界の物体を初めて口の中に入れたことになる。正確に言うと、空気中に飛んでいる細菌や排気ガスや酸素をずっと口の中に取り入れ続けているけれど、まとまった液体を、今初めて意識的に摂取したことになる。

僕も水を飲んだ。水の味は、以前外食店で飲んだ水の味と変わらない。おいしくもなく、まずくもない東京の水の味がした。

「これが戦争の開始イベント？」

「そう、牛と鳥が人間に抵抗するレジスタンスのオープニングイベント。牛肉を料理として出すことができず、牛の店員が動きを止めた。私たちは、彼女が葛藤する様子を目撃した。私たちによる観察が、戦争のきっかけになるかもしれない」

今のが、歴史の転換点？ 現実の可能性が分岐する、きっかけのエピソードなのか。

「お待たせしました。乳精卵、こちら半熟、こちら生です」

僕の小皿には、卵が入っている。彼女の小皿には、半熟卵が入っている。見た目は、鶏の無精卵と同じだ。

「牛丼を出すのに時間がかかっているけれど、乳精卵という卵は、すぐに出てきた。乳精卵って何だろう？」

「割ってみて」

僕は卵を手にとって、カウンターの端に当ててみた。卵の殻にひびが入る。卵を両手で掴み、手に力を入れる。小皿の上で、卵が割れた。卵の黄身は黄色だったが、白身は白色だった。

「生卵の白身は、透明のはずだ。乳精卵は、生卵の白身が、半熟卵みたいに白い。白身の白さが乳精卵の特徴か」

「乳精卵って、何の動物の卵かしら？ 店員さんに聞いてみる？」

「やめておこう。今は聞ける雰囲気じゃない」

オスの店員は、メス店員のそばに寄り添って、また小さな声で話しかけている。そんなに牛丼出すのに葛藤するなら、牛丼屋で働かなければいいのにと考えたが、複雑な事情があるのだろう。前日に親牛が危篤になっていたりして、精神状態が不安定なのかもしれない。

「乳精卵は、名前からして、乳と卵が結びついた食品のように思える。卵の白身が、牛乳に変異したんじゃないかな」

「卵の中に乳があるのは、自然の法則から外れている。卵が割れて外界に出た生物が、母親の乳を飲む。これが哺乳類。人間も牛も同じ」

「乳精卵は鳥類の卵だろう。哺乳類は、母親の胎内で卵が割れる。乳精卵は、卵のまま外界に出ている」

「鳥類の孵化前の卵の中に、哺乳類の乳が入っている？ 鳥類と哺乳類は、交尾できないでしょう。交尾したとしても、受精が成功するはずもない。まあそれはあなたが所属していた現実での話で、こちらの現実では違う法則で世界が成り立っているかもしれない」

彼女は僕の所属していた現実の自然法則にも詳しい。この新しい現実の法則にもすぐ詳しくなるんじゃないだろうか。

「乳精卵は、バイオテクノロジーによって生まれた新しい動物の卵かもしれないね。哺乳類と鳥類をかけ合わせた、新しい生物の卵。卵の中に母親の乳が入っている、栄養学的に見て合理的かもしれない理想の卵、乳精卵」

「そんな卵、孵化するのかしら？ 食べてみたらおいしいかもしれないけど。乳精卵は孵化しないことを前提に作られた卵かもしれない。人間の食用として、食べるとおいしいから、人為的に作り出された生殖目的ではない卵、乳精卵」

「どうする？ 乳精卵食べてみる？」

「やめておきましょう。そろそろこの店を出ましょう。これ以上ここにいると、本当に戦争が始まってしまう気がする」

僕は生乳精卵に醤油を入れていた最中だったが、醤油を調味料置き場に戻した。

「すいません、もう出ます」

二匹の店員がこちらを振り返る。

「大変申し訳ありません。もうしばらくお待ち下さい。すぐお出ししますので」

「お金返していただかなくて結構ですから、牛丼の注文はキャンセルにしてください」

「大変申し訳ありませんでした」

二匹の牛が頭を下げた。正面を向いたメスの店員のエプロンの胸の部分が、液体で濡れていた。悲しみと衝撃のあまり、牛乳でも出たのだろうか。

牛丼屋を出た。歩道に人の姿は見えない。自動車は相変わらず道路を絶え間なく走っている。

「これからどうする？ 牛や鳥がいそうな場所を探してみる？」

「知識が不足しすぎている。この世界の自然の原理と人間の文化行動原理をまず把握したい。どういう法則で現実が成り立っているのかわかれば、何が異常なのかもわかる。今は、牛丼屋に牛の店員がいても、異常事態なのかどうかとも判断つかない」

「じゃあ図書館でも行ってみようか。それとも、ネットカフェにでも行く？」

「図書館にしよう。マンガを読んでも、原理は理解できない」

ゲームの中の小島にいる時は、あれだけ真理の不変性を疑っていた彼女が、今は原理を知りたいという。原理とは、ある観察者の視点からの一解釈に過ぎないのに。

彼女の発言は、ゲームの中での発言と矛盾するように感じられるが、矛盾はしていない。彼女はゲームの中の現実と、僕の所属していた現実の原理は、把握していた。しかし、今所属する新しい現実の原理は把握していない。原理とは仮説に過ぎないとしても、歴史の中で、一定の正当性を証明されている。原理が間違っているとしても、知らないでいるよりは、知っておいた方が、推論が早く進む。

僕は中野区か杉並区の図書館に行こうと提案したが、彼女は国会図書館に行きたいと言った。というわけで、僕らは地下鉄に乗って、国会議事堂前に向かった。

国会議事堂前では、政府に対する抗議デモが行われていたり、地下鉄でサリンがまかされているかもしれない。まあいい。危険の発生する可能性があっても、僕たちは、異常を異常だと検知するため、現実の原理原則を知るため、国会議事堂前に移動することを選択したのだ。

アブノーマルが何かを知るためには、まずノーマルが何かということを知る必要がある。僕はノーマルよりも、アブノーマルの方が好きだが、アブノーマルがアブノーマルのまま自由に存在することが許されるためには、逆説的だが、ノーマルを守る必要がある。

ノーマルなんて一つもなく、多種多様なアブノーマルしか存在しないかもしれない。誰もがアブノーマルを肯定している社会の方が魅力的だが、そうした社会では、アブノーマルが、ノーマルになるのではないだろうか。僕はアブノーマルの存在可能性を守るために、アブノーマルの集積であるノーマルを守りたいのだ。

地下鉄に向かう。地下鉄のホームには誰もいない。僕の切符はパスモだし、彼女の切符は自動販売機で買った。改札は自動改札機だから無人でも通過できる。

地下鉄車両の到着を告げるアナウンスは、人間の生の声でなく、録音されたナレーションだった。

電車がホームに入ってくる。車両の先頭には、鶏の顔をした運転手がいた。

車両がホームに停車する。鶏の運転手がブレーキをひいたのだろう。ホームからの転落を防止するドアが、車両到着と同時に自動で開く。

車両には誰も乗っていない。僕と彼女だけが車両に乗る。

ドアが閉まる前の警告音になる。

「ドアが閉まります。かけこみ乗車はおやめ下さい」

ホームに人はいないから、無意味な警告だけれど、マニュアル化されているから、無人でも警告される。

電車が出発する。僕らは、鶏の運転手が運転する地下鉄に乗って、国会議事堂前に向かった。
(了)